

都市研究調査報告11, 1977

シンポジウム

## 大都市居住の諸問題

日時 1976年12月11日(土)

場所 東京都立大学第2会議室

司会者 古屋野 正 伍 (人文学部)  
中 野 尊 正 (理 学 部)  
主報告者 千 葉 正 士 (法 学 部)  
宝 月 欣 二 (理 学 部)  
石 田 頼 房 (工 学 部)  
副 田 義 也 (都老人総合研究所)

### 目 次

1 シンポジウムの趣旨.....99	4 最近の居住環境整備に関する研究の動向 (石田頼房) ..... 110
2 大都市居住問題についての提言(千葉正士) ... 101	5 大都市における老人問題(副田義也) ..... 113
3 都市環境における緑(宝月欣二) ..... 104	6 討議と総括..... 118

古屋野 お待たせいたしました。ただいまから始めさせていただきます。

### (1) シンポジウムの趣旨

#### 経過と目的

古屋野 まず最初に、都市研究委員会の委員長の中野

教授から、この会合を開きましたことのいきさつと申します。趣旨ということからお話していただきたいと思ひます。

中野 7月初めに1度、都市問題研究というものの全般的な討論を千葉先生がコンビナーになってやったわけですが、そのときに参加者の間からいろいろ将来の研究の展開ないしは研究組織の強化等について非常に貴重な意見がたくさん出されたわけです。それを聞きながら、来年度予定しておりましたところのテーマの一つ、きょうも「大都市居住の諸問題」という問題に関する研究ですが、そういう研究の意義あるいは研究課題等、より掘り下げていろいろと討論を行っておくことが今後の研究展開のために有効であろうという考え方をとったわけでありました。したがって、その時点できょうのコンビナーである人文学部の社会学の古屋野教授にその組織、それからこの研究会の持ち方等についてお願いしておいたわけですが、その後、古屋野教授は海外に出られまして、時期的には若干開催の時期がおくれたかという感じがいたしますが、本日こういう会を持つに至ったのです。

それから、現在この大都市居住に関する問題を大学の都市研究の第一のテーマとして都に予算要求を続けているところでございますが、いままで得られた感触では、その一次査定の段階で、つまり都が内示をする段階で、研究テーマについてはたぶん問題はないであろうというふうな感触であります。したがって、きょうの討論を踏まえて、さらに内容的な面を充実させながら4月以降の実行計画に取り組んでいくという運びになろうかと思ひます。

問題の性質はすぐ後で古屋野教授から御説明があると思ひますが、大変包括的であり多岐であり、したがって、多くの専門分野の方が関係し合うという点で、方法論の統一その他についてかえって困難があるかと思ひますが、その辺を克服していかないと、ねらっている研究成果というものは上がってこないだろうと考えますので、本日は公開のこういう討論会でいろいろと御意見を出していただいて、そういうものを通じて、集約しながら次年度以降の数年にわたるプロジェクトを展開していくような下地にしていきたいと考えております。どうかよろしくお願ひします。

### シンポジウムの狙い

中野 続いて古屋野先生に本日のシンポジウムの狙いそのものについてお話をさせていただいて、その後で黒板にありますような、また御案内してありますような4人のスピーカーの方に問題提起、話題を提供していただくという運びにしたいと思ひます。

それではどうぞ。

古屋野 人文学部で社会学を専攻しております古屋野です。

いま委員長からお話がありましたように、このシンポジウムは都市研究委員会としての新年度の1つの研究テーマの設定ということとも大変密接に関連しているわけでございますが、きょうはその第2回目ということになります。

それで、私はオーガナイザーのようなことを仰せつかりまして、きょうのスピーカーの先生方にご発表をお願い申し上げたわけですが、テーマをここにございますように「大都市居住の諸問題」ということにさせていただきます。これは都市研究委員会、これから将来センターということになってまいるかと思ひますけれども、そこで取り上げます1つの研究テーマと密接しておりますので、その研究の進展をも含めて、討論の内容を少し深めさせていただくという意味、願ひを込めまして「居住」という論題を設定いたしました。

これは御承知のとおり、いわゆる Habitat 会議と称するものがカナダで今春開かれたわけでございます。そこでも、Habitat というのはやはり居住という意味に考へておるようでございますが、大変広い意味を持っております。もちろん住宅問題が1つの中心にはなるかと思ひますけれども、その住宅よりもさらにもっと広く、たとえば都市における人間生活ということが非常に大きな重要な問題になっているかと思ひます。そして、生活をしていく上に必要ないろいろな都市の環境条件をどのように整えていくかということになってまいりますので、問題は相当広範囲にわたってまいります。

それで、きょうはその中で4つのサブテーマを立てさせていただきますましたが、1つは、こういったいわゆる学際的な研究を展開するに当たりまして、その研究の方向とでも申しましうか、そういうことについて法学部の千葉教授から提言をいただきたいと思ひます。制度問題ということにも少しお触れいただけるかと思ひますけれども、そういうことでお願いしております。

それから次に、当然の非常に重要な問題としまして環境の問題が出てまいります。理学部の宝月教授に大変御無理を申しまして、きょう掲げてございますような「都市環境における緑」というテーマでお話をいただくことにいたします。

それからさらに、当然、計画ということが出てまいるわけでございますが、工学部の石田教授から、計画の御専門ですけれども、それをもう少し広げまして環境整備というふうな観点からお話いただくことになっております。

それからさらに、これは人間生活という方から福祉の問題が大変大事なテーマとなつてまいりまして、いまやっておられる研究の関係から、老人問題というところ

にかなり積極的に触れる形で東京都の老人総合研究所の副田教授にお話を願おうと考えております。

それで、何か学際的というようなねらいが確かにあるわけですが、学際的ということを考えてみますとなかなかむずかしゅうございます。やはりいろいろな学問の枠を取り払って、研究を進めていくという方向がございすけれども——もちろん専門分野の専門化ということの方が先決であることは申すまでもございせんが、そういう枠の問題が1つあります。しかし、学際ということを考えます場合に、枠ということもそうですけれども、研究対象がそういう学際的なアプローチを要求すると申しますか、そういうやり方でなければ進まないというふうな非常に重要なテーマがあるのではないかと。都市の問題などというのはまさにそういうことです。ただしかし、都市学というふうなことを提唱される方もありますけれども、都市学も重要ですけども、さらにもう一つ、都市の中でどういうポイントを突いた研究が深められなければならないかということがさらに先決であるように考えられます。そういうような気持ちから、とにかくこれは研究の枠をどうこうするという方向からでなく、非常に重要な都市の中の、今日は「居住」というやや変った題名になりましたけれども、そういう観点から都市へのアプローチを深めていただくという考え方を出示しております。

何か前置きがどうも大変勝手な議論になりましたようで恐縮でございますけれども、どうぞひとつよろしくお願ひ申し上げます。

それで、大変御無理を申しまして御発表の時間を30分ということにお願いしておりますが、何とぞその辺をお守りいただきましてお話いただけたらと思います。

それから、お話いただきました後で、やはり時間を少しでもとりまして御質問なり御討議をいただきたいと考えております。

それでは千葉先生、よろしくお願ひいたします。

## (2) 大都市居住問題についての一提言

(千葉正士)

千葉(法学部) 法学部の千葉です。

こういう題で御報告するとしますと、私自身の経験と能力から言っているところと限界がありますので、本来ならばそれを初めに申し上げて御了承を得たいところですけども、時間を節約する意味で一切それを省きまして、直接申し上げたいと思う点だけにいたします。

ただ、1つだけ前提とさせていただきますと思うのですが、大都市居住ということは本日の主要テーマですけれども、それを一般論としても考えると同時に、もう1つ高層住宅ということとその1つの典型的な例として考えを進めていきたいと思ひます。これは本日の組織者で

ある古屋野先生がすでに長らく研究しておられまして、この大都市居住の問題ということについても恐らくそれが重要な問題になっておられると思ひますので、そういうように取り扱わせていただきたいと思ひます。

### 都市の公理

千葉 私、いままで直接こういう問題について研究したという実績がありません。ただ、数年前に「都市の概念」というテーマで、学内の多くの方の御協力を得て多少研究いたしました。これは、多くの分野で行なわれております都市というものの考え方、観念、概念を調べ上げて、現代都市がどのように理解され、どのように問題視されているかということを整理したものでございます。これはそういう研究の性質上、いわばきわめて雑多な、多面的な結論しか出ません。そういうものですけども、最後にわれわれなりに、現代における都市の公理は何かということを考えまして、多少乱暴な点もあったんですけども、それを3つにまとめて提案いたしました。それは「都市研究報告」の47号に記してございます。

とにかくそういうものがわれわれの仲間ですみましたので、それを前提として、都市の公理から発展させた場合に、この大都市居住の問題というものはどのように見られるであろうか、どういうところに問題があるであろうかということを考えてみたいと思ひます。これから申しあげることは大変一般的な推論ですから、ずいぶん間違った点もあるかと思ひますけれども、皆さんと一緒に考えて訂正していきたいと思ひます。

それでは、都市の公理というのは何を指すかと言いますと、こういうふうに規定しております。あらゆる都市研究が、科学であるかぎり前提として追求し奉仕すべき現代都市の原理です。これは、都市研究と称するものが、科学として都市をながめた場合、その対象にどういう原理が内在しているかという理論的な問題意識に立っています。

それから、そのような原理があるならば、これをどのように利用し活用したら今後のわれわれの生活のために役立てられるか。これは実践的応用の面になりますが、そういう問題意識も含めまして、追求し奉仕すべきものというふうに表現いたしました。公理とは言ひますけれども、これはかなりルーズな概念です。

それでは、そういう都市の公理として何があるかと言いますと、われわれの議論の中では3つ出てまいりましたが、それは、あるはずの公理の必ずしも全部ではないのですが、発見されましたその3つを1つ1つ当たってみようと思ひます。

### 社会構成原理としての都市

千葉 第1は、都市とは部分的地域のことでなくて

社会構成原理のことであるということです。これはこういうふうに表示してございます。「現代の都市は、部分的な地域社会というよりも社会・文化の都市的原理と理解されなければならない。」これがその表現です。

都市という問題は、もちろん地理学的に言っても社会学的に言っても農村と対照する1つの部分社会という形で問題としてとらえられてまいりました。それで都市と農村というものの区別がやかましく議論されておりましたが、この区別論というのは結局明確な結論が得られません。ということは、裏を返して言いますと、両者は分離し切れない関係があるということです。その上、特に最近の世界における都市の発展状況を見ますと、もはやいわゆる農村と言われる部分社会にも都市的なものがかなり浸透しております。反対に都市においても、特に現代の日本の都市などにおいては、いわゆる農村的な原理と言いますか生活様式というようなものもまだ依然として残っている。そういうようなことを考えますと、われわれは都市ということを研究すると言っても、いわゆる地域的な都市における問題だけではなくて、むしろ都市というタイトルで、都市という概念で象徴される社会原理あるいは文化原理そのものを都市として問題にすべきであるという趣旨です。

そういたしますと、この大都市居住ということも、決していわゆる地域的な大都市におけるものだけではなくして、特に日本において言うならば、各地方・農村にも大都市居住的な居住形態があります。それから、建物で言えば高層アパートと言われるものもございます。もちろんその高さ、規模においては地域としての都市にあるものの方がはるかに大きく、特徴もあるのですが、しかしこういう地域としての都市にそういうものができることによって生ずる社会変化、文化変化、それからいままではいわばカヤぶき2階建て程度の農村に3階なり4階なりのコンクリートのアパートができるということの意味とを比べてみますと、後者の方にもっと大きな変化なり意味があるのではないかと考えられるわけでございます。

ですから、大都市居住ということは、いまの第1の公理の点から言いますと、世界のことは差しおくとしても、日本について言いますならば、日本の全国に見られる大都市の居住形態が問題として取り上げられるべきだろうと思うのです。と同時に、形態的に見ても、そういうもののいわゆる都市におけるものといわゆる農村におけるものとの相違があります。この相違がどこにあるのか、それからその相関性がどこにあるのかということがこの第1の公理から出てきた問題のように思うわけです。それが第1の点です。

### 欲望の集積場所としての都市

千葉 それから第2の公理は、都市は人間の欲望の集積の場所であるという趣旨です。これは主として建築学の桐敷教授の御意見が皆の賛同を得て入ったことですから、私がこれをうまく説明できないことをおそれますが、一応書かれたところによって申し上げますと、こういうことです。文章としては「近代都市は近代人の欲望の集約表現である。」こういうように書かれております。

桐敷教授の都市観というのは大変独特で、また巨視的な目を持っていて大いに示唆的です。それで、最近都市というものがとかく人の合理的・意図的なコントロールのもとから逸脱していくことによって都市に対する悲観論が多いのですけれども、桐敷教授はむしろ都市の非常に広大あるいは食欲な吸収力の方に大きな意義を認めております。その意味は、都市が吸収するところのものは何かと言いますと、われわれが普通、都市とか都市的とかと言っているものによって表現されるものではなくて、およそ人間の、近代人の持っているあらゆる欲望が含まれているということです。

このことを私なりに考えてみますと、人間が本来生物として持っている欲望あるいは文化的存存として持っているところの希望・理念というものがすべて集約的に表現される場所だということだろうと思うわけです。したがって、とかく都市はいわゆる文明生活の尖端であるということと言いますけれども、同時にその都市にはきわめて非文明的、時には未開・野蛮と言われるような人間の生の本能が存在している場所であろうと思います。他方で言うと、きわめて倫理的なものもあると同時に、逆にきわめて非倫理的・犯罪的なものもありましょう。そういう意味でわれわれが普通、社会観において持っている両極端の対立する2つのもの、新とか旧とか、あるいは善とか悪とか、共同と孤独であるとか、合理・非合理、有用・有害というようなもののすべてが都市にあるというように理解すべきだろうと思うわけです。

そうなりますと、都市生活においては、とかくいわゆる都市的に、つまり人類文化から見ると先進的につくられた形態・生活様式というものが着目される傾向がありますけれども、実はそうではなくて、そういういわゆる都市的なものによって加工されない、あるいはコントロールされていないところのどろどろとした生まの人間的なものがあるということを十分認識して、それを適当に処理する方法を同時に考えなければならぬことだろうと、私は考えるわけです。ちょっと妙な表現ですが、都市的というものによって把握・コントロールされないものをいかにして把握しコントロールする方法を考えるか、そういうところに都市生活を人間の欲望の生活としてうまく導いていくための条件があるように思う

わけです。これが第2の点です。

### 技術の実験場としての都市

第3の公理と言いましたのは、都市というのは人間の発明・創造したさまざまな技術の実験場であるという趣旨です。「都市は、人間が新たに発明したテクノロジーおよび社会統制技術の社会的実験場である。」というように申しております。「都市は自由にする」というのは古来有名な標語ですけれども、その「自由にする」というのは、一方で言えば、都市においては農村になかった新しいテクノロジーによるところの生活様式の進歩があります。それから他方、都市においては社会生活において個人の自由が増進されます。そういう意味でその言葉が言われたのだらうと思いますけれども、歴史を見ましても、大体都市は常にその全体社会の前進の尖兵となっております。

これはもちろんテクノロジーの進歩がありますのと同様に、やはりそこに社会統制、ソーシャルコントロールの方式の変化・発展が伴っているからだと言えます。その点を逆の方向から見ますと、ある全体社会が住民が利用できる場所のテクノロジーを発展させた場合、それから新しい社会統制技術を発明した場合、その最初に実行される場所が都市であったと言えます。その意味で、旧来の陋習にまみれた、あるいは旧式のテクノロジーや社会統制技術を超える新しいものがあるという点で、都市はまさに進歩の尖兵には違いありませんでした。

しかし、そこに問題があります。と申しますのは、新しい技術というものは、テクノロジーにせよ社会統制技術にせよ、いずれも実験であるという性質を免れません。仮に研究室的な実験を経たものであっても、実際に社会に応用する場合には、それ自体やはり1つの実験のプロセスです。ですから、そういう諸技術がその人、そこに住む人々、その社会の本当の前進なり幸福なりに役立つかどうかという点、これは実験過程を経なければわかりません。実験過程においては技術自体の不備なところあるいはその応用技術の不備なところが露呈いたします。と同時に、従来のなれた生活あるいは技術が変化することによって当然紛争が起こってまいります。社会的紛争というものはとかく危険視されますけれども、いまのような見方から見ますと、社会的紛争というものはむしろ実験過程において必然的に起こってくる現象である。と同時に、むしろその実験に不十分な点があるということを示すところの徴候、それも非常に重大な徴候であると考えます。

大変乱暴な言い方ですが、これをくくって申しますと、社会が新しいテクノロジーや社会統制技術を発展させ、それを都市と言われる社会において実施・実行する

場合、実験期間においては紛争を免がれない。紛争が起こった場合にはそれを実験過程と理解して適切な修正を考えなければいけないということだろうと思います。そして修正がきわめて困難であるならば、むしろその発明されたと思った技術が誤っているということで、根本からこれをやり直すことも必要だろうと思われます。

そういう点からこの大都市居住ということを考えますと、特に日本では一挙に地方から人間が集中して、そういう人達の地域性、つまり都市における地域生活の社会統制技術も、その人たち固有のものとして発展したとは言いがたい借り物で、行き当たりばったりというところが多いようです。建物にしても、アパートの大きなものがあればいいという、そんなことを言っただけに建築の先生もいらっしゃるのに大変恐縮ですけれども、部外者から見るとそういうようにも言いたいほどの簡単な着想でつくられていることがあるように思います。

そういたしますと、実はわが国で大都市居住生活ということは実験が緒についたばかりである——緒についたと言うことは、これはよくありません。緒についたと言うと成功するという意味になりますから、実験が始まったばかりだ、これを徹底的に実験の過程と心得て、もっと虚心にその欠陥なりそこから起こってくる紛争を理解し、真剣に考えて対策をとることが必要だということになるかと思えます。

私の申し上げたい点はそれだけに尽きます。非常に抽象的・一般的な公理からかなり具体的な問題を引き出さなければなりませんので、いま申したことも全く空々漠々たるものですが、来年、幸にして大都市居住に関するこの共同研究ができますならば、そういうところで私自身も少し勉強していきたいと思っています。

### 都市と法律制度

千葉 それで、最後に一言ちょっと触れておきます。それは、古屋野先生が最初私の報告をお求めになったのは、私が法学の専門家として、法律制度の面から都市を見る場合、あるいは来たるべき都市をどのような法律制度によって導いていくかという場合の問題、について何らかの示唆を待望なさったようです。しかし残念ながら私自身はその能力がないし、それから調べてみますと、現代の法学というものは決して、日本ばかりではなくて世界でもそういうことの能力を一般的に備えておりません。この法学部には、少数の方ですけれどもこれから都市の問題を広く検討しようかという方もいらっしゃいますけれども、まだなかなか実績がないところです。そういう点で法学も都市の問題に腰を据えてかかった状況にない。それから法律制度自体もそういうわけです。大変不完全です。その点、ほかの社会科学、自然科学の方からかなり批判がございまして、法学者はもっとしか

りやれというふうに言っていたいでいる状況です。それは確かにもっともです。他面私から申しますと、ほかの分野の方でももう少し法律というものを恐れなくて、遠慮なく踏み込んで取り扱い批判もしていただいでいいのではないかという気がいたします。少し飛躍しますけれども、ヨーロッパやアメリカの知識人とか学者というのは、自分の専門だけではなくてかなり法律のことを知っていて、それをどんどん研究範囲に取り入れますね。これはそういう文化が根底にあるからですけれども、その限りで見るならば私はうらやましく思うわけです。そんなわけで、法学者ももちろん努力しなければなりませんけれども、他の分野の方の激励と努力とも相まってこの問題を前進させたいと思うわけです。

そしてまた、私自身はかねがね農村の祭りの地域生活における意義を追いかけておりましたので、都市における祭りが現在地域コミュニティの生活にどういうように意義を持っているかというようなことをこれから少し追求したいと思っております。つまり祭りという1つの生活形態が、日本という全体の中で、いわゆる農村的なものといわゆる都市的なものと両方にまたがる作用をしていて、しかもそのうちには都市的なものが認められる、そういうことを追いかけていきたいと思っているわけです。

以上、大変まとまりませんけれども、ほんの皮切りとしてお話をさせていただきました。

**古屋野** どうもありがとうございました。いまのお話の中でお述べになりましたことを「都市研究報告」に論文としてお書きになっておるといってお話がございましたが、この「都市研究報告」と申しますのは都市研究委員会が発行しております機関誌でございまして、これは大体季刊ということになっております。今後これはなお一層充実させていきたいという希望をわれわれは持っておりまして、これからお目に触れることもあろうかと思えます。

それから、いまのお話などを伺いながら、私は社会学という1つの狭い分野にかかわる者としていろいろ感銘したことでございますが、たとえば都市というふうなものは1つの地域にすぎないのだ、だから社会変動というようなことは必ずしも関係は余り密接でないという議論などもされております中で、非常に明確に、これは1つの地域にかかわらないものであるという都市の現実の広さと深さと申しますか、そういうことにも最初のところからお触れいただいたということで、最後にもおっしゃったわけですけれども、やはり学際的な研究ということの必要性を非常に感じさせるテーマだという認識を私としましても大変強く持ったような次第であります。

それで、きょうのお話は、最初御紹介申しましたように4人のスピーカーの方々にお願いしておりますわけで

すけれども、その分野ということでも、いまの千葉教授が社会科学、法学ということで、それからあと、きょうご用でおいでになるのがちょっとおくれてしまってお見えになった副田教授がやはり社会科学の社会学の御専攻、それから宝月教授が理学部というお立場で環境問題をお扱いいただけるということと、石田教授に都市計画ということをお願いしてまおりますので、そういう意味からしましても、いまの千葉教授のお話はこれから展開してまいります話の何か要点に非常に触れておられると拝聴いたしました。

それでは宝月先生、「都市環境における緑」というお話をお願いいたします。

### (3) 都市環境における緑(宝月欣二)

**宝月(理学部)** 私、いま御紹介いただきました理学の宝月でございます。

きょうは「都市環境における緑」ということを申し上げますのであります。

最初、人間というようなものを考えてみますと、申し上げるまでもなくいまの世界人口が大体40億で(図1)、40億の人間の平均体重を仮に40キロといたしますと、人間の地球上における目方というのは大体  $1.6 \times 10^8$  t という値になります。それではもう一方、地球上における動物の目方というのはどのぐらいあるかと言うと、これはアメリカのホイッターカーという学者が計算しておりますけれども、彼によりますと、陸上で  $1 \times 10^9$  t の動物、

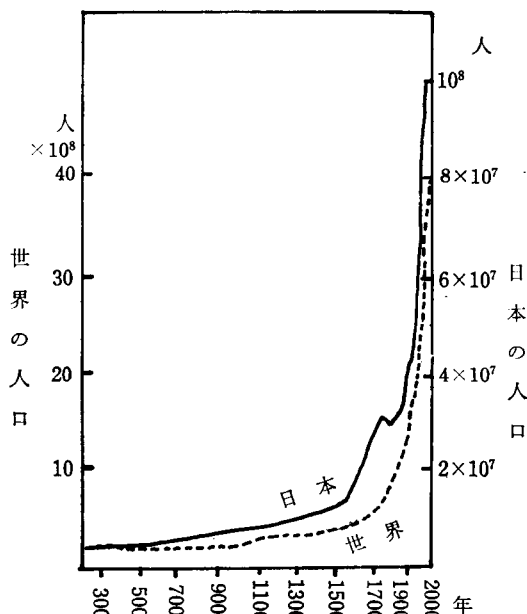


図1 日本及び世界の人口増加(門司より引用)

表 1 地球上の主要生態系における純生産量, 生物量, 落葉枝量, 値は有機物量 (Whittaker, 1975により, 一部改変)

生態系	面積 (10 <sup>6</sup> km <sup>2</sup> )	Pn.*(g/ m <sup>2</sup> /yr) 平均	地球の Pn. (10 <sup>9</sup> t/yr)	B**(kg/ m <sup>2</sup> ) 平均	地球の B (10 <sup>9</sup> t)	落葉枝量 (10 <sup>9</sup> t)	動物の生物量 (10 <sup>6</sup> t)	B/Pn.
熱帯多雨林	17.0	2200	37.4	45	765	136	330	20.5
熱帯季節林	7.5	1600	12.0	35	260	38	90	21.7
温帯常緑林(照葉林)	5.0	1300	6.5	35	175	60	50	26.9
温帯落葉林(夏緑林)	7.0	1200	8.4	30	210	35	110	25.0
北方針葉林	12.0	800	9.6	20	240	144	57	25.0
高本及低木疎林	8.5	700	6.0	6	50	34	40	8.3
熱帯禾本草草原	15.0	900	13.5	4	60	60	220	4.4
温帯禾本草草原	9.0	600	5.4	1.6	14	32	60	2.6
寒地及高山荒原	8.0	140	1.1	0.6	5	16	3.5	4.5
砂漠及半砂漠	18.0	90	1.6	0.7	13	18	8	8.1
極乾・岩石・砂・氷荒原	24.0	3	0.07	0.02	0.5	1.2	0.02	7.1
耕地	14.0	650	9.1	1	14	56	6	1.5
湿地・沼沢	2.0	2000	4.0	15	30	14	20	7.5
湖沼・河川	2.0	250	0.5	0.02	0.05		10	0.1
陸地合計	149.0	773	115	12.3	1837	644	1005	16.0
大洋	332.0	125	41.5	0.003	1.0		800	
湧昇流海域	0.4	500	0.2	0.02	0.008		4	
大陸棚	26.6	360	9.6	0.01	0.27		160	
海藻群落及サンゴ礁	0.6	2500	1.6	2	1.2		12	
入江	1.4	1500	2.1	1	1.4		21	
海域合計	361.0	152	55.0	0.01	3.9		997	
地球合計	510	333	170	3.6	1841		2002	

Pn\* : 純生産量      B\*\* : 生物量 (after whittaker, 1975)

これは人間を含んでおりません。それから海の中におよそ1×10<sup>9</sup>t(表1)。人間が陸上に生活することということで、陸上の動物と人間の目方を比べてみますと、人間の目方が全動物の大体6分の1になっております。御承知のように現在世界人口が1.9%がぐらい年間ふえているということが言われておりまして、大体そのレートでいけば35年ぐらいで倍増する、もうしばらくすると動物の目方の3分の1にもなるというような、生物の1つ種類としては非常に異例のふえ方を人類は地球上でしているわけであります。しかもそういう人間が、多くの先進国においては都市に集中しているということ、これがきわめて重要な問題であると思うわけです。

もう一方、今度は人間の生活というふうなものをながめてみますと、私はずっと生態学というものをやっております、そういう立場でいろいろこれから申し上げてみたいと思うのでありますが、人間の生活というものを考えた場合には、いわゆる生物的人間と言われるよう

な、ほかの動物と本質的にはそう変わらない生活面と、それからもう1つは、やはりほかの動物とは違って、人間が道具を使い、文化を持って科学技術を発達させる、そういうようなことで行っておりますいわゆる脱生物的人間と言えるような面と2つの側面を持って生活しているわけであります。

これもよその方のデータによりますと、大体世界平均で生物的人間が1年間に使っているエネルギーはおおよそ1.5×10<sup>4</sup> cal 体重1グラム当たり1年という値が出されております。それに対して、脱生物的人間が使うエネルギー、これは主として化石燃料の消費量から計算されておりますが、これが2×10<sup>5</sup> 単位は同じであります。すなわち世界平均から見ても、人類は生きるために使っているエネルギーの約13倍ぐらいのエネルギーを脱生物としての活動のために使っている。これも先ど申し上げました都市集中、しかも工業先進国においては一層大きいという状況があるわけであります。

日本の場合、これもほかの方の計算でありますけれども、それによりますと、脱生物的な人間の使っているエネルギーが生物的人間のエネルギーの70倍ぐらいになるということを言っております。日本全体がもし70倍いたしますと、京阪神とか京葉という人口が密集している工業地帯ではこの比がもっともっと大きくなっている。これがやはり環境その他の問題に非常に大きく働いていることはもう申し上げるまでもないわけであります。

一方、われわれ人間が生きていく場合に、生物としての生活を全うして、その上に脱生物的な人間としての生活があることも申し上げるまでもないわけであります。それで、人間は脱生物的な面で環境からなるべく独立する方向にずっと進んできている、これは疑い余地もないわけですが、これも言ってみればお釈迦さんの手の平の中を飛び回った孫悟空というようなたとえもなされますように、しよせん人間は環境というものとは離れて生きていけない存在であることは間違いないわけであります。一体人間が環境、特に生物的環境、あるいは緑と言ってもよろしいのですが、そういうものとどういう面でつながっているかということをここでちょっと考えてみたいわけであります。

#### 人間と生物的環境

宝月 1つは、いろいろの生活資源というものをそういうものから得ている。ここで緑と申しますのは天然自然の植物群落、それから人工的な群落、あるいは畑や水田という農耕地の緑も含んでいるわけですが、そういう資源をそのような生物的な自然から得て生きているわけでありまして、この面について考えますと、都市の生活というものは直接には余りこれに依存しなくてもやってきている。言いかえれば、都市以外のほかのところの、言うなれば農村あるいは山林というようなところの生物資源を運んでくることによって都市が代謝し、生きているわけであります。

それからもう1つの重要な点としましては、生物としての人間の生活環境を保全するという機能が生物的な自然に非常に強いわけであります。これは申し上げるまでもありませんように、大気あるいは水、土壌というふうなものの浄化という面で、自然の営みにわれわれは支えられて生きている。この点について都市というものを考えた場合に、これは後で申し上げますように、都市は完全に自分で生活環境を保全するという能力を一般には持っておりません。やはり周りの自然に依存して都市がその生活環境を保全しているという、これはある意味では都市の宿命みたいなものであると思うわけであります。

ただここで、最近環境問題などで非常に強くあらわれてきている現象といたしまして、この環境に対するいわゆる南北問題と言えるような、たとえば都市の生活者は

他所にいる自然を残せと言ひ、地元の人は開発をしというような意見の対立が非常に強くいま日本では出てきております。こういうような問題は今後の都市の環境保全というような点からすれば極めて重要な点になり得る問題であると考えているわけであります。

それから3番目に、われわれの生活と生物的自然とのつながりを考えます場合、やはり学術的に貴重な自然を残したいという強い要望があるわけであります。これは別に野外生物学者のエゴというわけではありませんが、先ほど申しましたように40億の人間がいま地球上におり、今後さらにそれがふえていくという全体の状況から考えますと、人類の将来というものはそういう自然をいかに利用、管理していくかということにかかってきているふうに申せるかと思うのであります。その場合、いかに自然を利用、管理していくかということについての方法は、やはり現在の科学では自然をよく理解する、そこから出発せざるを得ない。そういへ意味で、いろいろの自然がわれわれの周辺に残されていないと困るということであります。この点に関しては、都市の中の緑、自然というようなものは必ずしも不可欠なものとは言えないのではないかという気がいたします。

それから4番目の問題といたしましては、いわゆる遺伝子プールというものを大事にしなければいかぬという論がげよくなされます。これは申し上げるまでもなく、今日の人類の繁栄というものは栽培植物あるいは飼育動物というものを使って食糧問題を解決してきたためであります。こういう生物はいずれも昔は野生の状態であったものを人間の目的に合うように育種してきたわけがあります。そういう意味で、今日使われていない生物の中に今後どういった必要なものが出てくるかわからないので、やはり遺伝子の非常に重要なプールである自然を大事にするべきであるという論であります。これも申すまでもなく、必ずしも都市と密着して考える必要はあるいはないかもしれない、そういう気がいたします。

以上4つは比較的自然科学的な色彩の強い自然とのつながりの考え方ですが、このほかに、申し上げるまでもなくわれわれの文化あるいはいろいろな人間関係、これはもちろん文化の基底に入っているわけですが、そういう文化の基盤としての自然というものが非常に重要な意味を持っているわけであります。

それから6番目といたしまして、自然の人間に与える心理的あるいは感覚的な問題。これは、特に人間の感覚に対して緑が かの色に比べて非常に安ぎを与え るとか、あるいは日本の都市のいろいろのところで、一体住民が自然に、どのくらいの量の緑に対して充足感を持ち得るか、こんな調査が国のいろいろの機関でなされてきております。いずれにしても、やはり多くの人にとってはその身近に緑があるということが安らぎあるいは



レクリエーションに不可欠な要素であるという結論になるようであります。

人間生活にとって生物的自然の意義を大きく分けますと以上6つぐらいの項目に分けられるかと思うのでありますが、きょうここで申し上げたいことは、主として生物学的あるいは生態学的なサイドからに限定させていただきたいと思うのであります。決して文化あるいはその心理的な効果というものを過小視するのではなくて、これは都市におけるわれわれの生活ではあるいは1番大事なものという気さえするわけですが、私の専門とちょっとずれますので、これは申し上げることは差し控えたいと思うわけであります。

### 自然の生態系と都市生態系

**宝月** 今度は生物の人間というものの生存を考えます場合、やはりわれわれは自然と離れて生きてはいけませんが、これは申し上げるまでもないわけですが、こういう自然についての認識としまして最近生態系という考え方が非常に強く出されてきているわけであります。これはもう申し上げるまでもありませんように、ある地域の無機質な環境とそこにいる生物群集を1つのシステムというのとらえ方で見ているわけであります。このシステムというものが、ある構造、機能を持って自己規制的に、あるいは場合によりますと構成要素の相互の関連のものに発展していった、そしてだんだん安定の状態に近づき、そこで安定する。安定した生態系においては、いわゆる物質循環という点から見ても有機物の合成と分解がつり合うというようなことで、これが安定が保たれているわけであります。

時間もございませんので、この生態系のことについて詳しく申し上げることは差し控えさせていただきますが、ただここで、都市生態系という言葉が最近非常にしばしば使われているわけであります。その都市生態系と、いま申しました自然の生態系、これは一体同じようなものであるか違うものであるかを考えることはこの都市環境について非常に重要なことであると考えられるわけあります。

それで、両者を比べますと、非常に違う点は構成要素のバランスが違うという点かと思えます。自然の生態系におきましては、太陽のエネルギーを取り込み有機物を合成するという働きはもっぱら植物がしているわけあります。その植物の合成した有機物を動物あるいは人間もその中に入れられるわけですが、いわゆる消費者と呼んでいます一群の生物が利用し、さらにそのかすを分解者と呼んでいますバクテリアが分解して、それで分解と合成がつり合う、そういう状況で系として安定するわけあります。ところが、もすまでもなく都市というところできわめて人間サイドに大きな比重がかかっ

ているということが言えるわけであります。

ちょっとその例を申し上げますと、地球上での植物のすべての目方というのが、推定によりますと有機物にして大体  $1,800 \times 10^9 \text{t}$  ぐらいの量があると言われております(表1)。この値というのは、先ほど申し上げました陸上の動物の千倍の量の有機物が存在していることになります。このような状況で地球上全体としての物質循環がほぼ安定に保たれてきているわけであります。

これに対して、では一体東京都ではどうかということを見ますと、これは全く1つの試算にすぎませんけれども、東京都の出しております統計によりますと、23区の中に約880万の人が住んでいる。23区の面積が577平方キロぐらいある。そういたしますと1平方キロ当たり1万5千人の人がいることになります。もしわれわれ都民1人当たり40キロの体重を持っているといたしますと、大体1平方キロ当たり600トンの人間がいることになります。1平方メートル当たり直せば6キログラム。一方、都の23区の中における緑の量をもし緑比率、地表面を覆っている緑の率であらわしますとほぼ14%。非常に少ない区もございますが、これより多い所もあって平均ほぼ14%ぐらいになります。それで、植物が地表面を覆っているところの平均的な植物の量を仮に1平方メートル当たり2キロといたします。1平方メートル当たり1キロというのが、この辺で言えば比較的良好な、たとえば多摩川の土手のヨシ群落というようなものがほぼ1キロぐらいの値であります。芝生もあり林もありますけれども、一応2キロといたしますと1平方キロ当たり280トンという値になります。それで人間の方が1平方キロ当たり600トン。言いかえれば大体2倍あるいは2.5倍ぐらいの人間がいるわけです。地球上全体では動物の千倍もの植物があるという状況でありますけれども、都市というものは消費者である人間の量が圧倒的に大きくなっているということの1つの例であると言えるかと思うのであります。

そういう意味で、自然生態系と比べまして都市生態系というのはまず構造的に非常にアンバランスになっているということ。それからもう一つ申し上げますと、普通の生態系では先ほど申しましたようにそこで有機物が合成され、その中で分解される、そこで合成と分解がつり合っているということでありますが、都市生態系というのはそういう意味では自立できない系であるということが言えむわけであります。いま申しましたように、植物がきわめて少ない。したがって植物による有機物合成がきわめて少ない。それに対して消費、分解が非常に大きい。結局そこで使われるものは周りの、ほかの生態系でつくられたものが持ち込まれて消費されているという形であります。そういう意味で合成と分解がつり合わないということ。それから、それと同時に、この中で物質

循環がやはり普通の生態系ときわめて違った状況にあります。これは申し上げるまでもありませんように、よその系から流れ込んで、都市を通して外へ抜けていってしまうという性質の生態系であります。

### 都市の緑

**宝月** ほかにも考えればいろいろ違う点もございますけれども、ただ、ある1つのエリアの中で生物を含む、あるいは人間も含まれるそういうシステムとして考えるという点で都市生態系という考え方が使われているのであらうと思えますけれども、本質的には一般の生態系と非常に違った性質を持った都市生態系であるということが重要な点かと考えるわけであります。そういうものの中で、一体都市というふうなものをどう考えるか、あるいはそこでは自立できる系としては存在し得ないわけですが、都市環境というものを考える場合、自然、特に緑との関連を少し申し上げてみたいわけであります。

例といたしましては空気中の炭酸ガスをとって申し上げてみたいと思います。炭酸ガスというのは普通空気中に 300 ppm ぐらい含まれているというふうに長らく言われてきたものであります。そして、炭酸がふえても人間がすぐそれでどうということではございませんけれども、ただ炭酸濃度は、たとえばほかの  $\text{SO}_2$  とか  $\text{NO}_x$  とか、そういう人間活動の環境に及ぼす影響の1つのメジャーになり得るものだとわれわれは考えているわけがあります。それで、地球上では光合成によって生産者、緑色植物が炭酸を取り込み、それからいずれその生態系の中でつくられた有機物が無機物にまで分解される。そういたしますと環境の炭酸は差し引き変化がないということになるわけであります。ですから、もし都市を考えますと、農村でつくられた食糧が都市に持ち込まれる。その場合には、都市に送った食糧中の有機炭素に比例するだけの炭酸が農村から減って、そのかわり減った分が都市で出てくる。だから大きなスケールで見れば、われわれが天然の食品を食べている限り地球全体としては炭酸のふえも減りもないということになるわけであります。

これは食糧に限りませんで、木の葉が茂り秋になって落葉する、その場合に有機炭酸に空気中の炭酸が取り込まれ、また落ち葉が分解すれば空気中に炭酸となって出ていく。この場合も、1年を通じて落ちる量とか分解される量がつり合っている。普通安定した生態系ではほぼそういう状況が予想されますが、そういうところではやはり炭酸の変化がないはずであります。

ところが、御承知のように現在地球大気では炭酸濃度は明らかに増加し続けております。有名な例といたしましては、ハワイのマウナロアというところでアメリカの

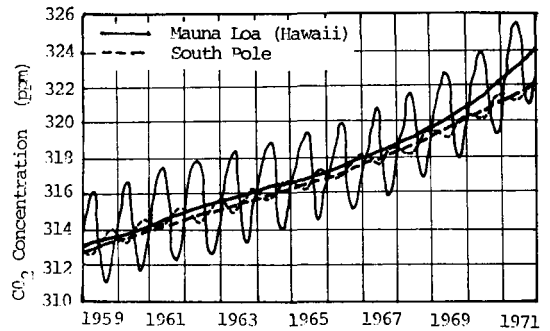


図2 Mauna Loa 及び南極大陸の大気中の  $\text{CO}_2$  濃度 (Ekdahl and Keeling 1973)

スクリップスの研究所の人たちが長年測定したところによりますと、12年間にハワイのマウナロアの 大気は 11 ppm ぐらい炭酸がふえております。全く同じ傾向は南極大陸で、やはりスクリップスの人たちが計った結果にも報告されております(図2)。このように地球全体としては炭酸が非常にふえてきている。これの理由は、もう申し上げるまでもなくわれわれが化石燃料を大量に消費していることによっているわけであります。

昨年それから1昨年と、私どもの研究室でも深沢及び川崎、それからよその大学に協力をお願いしまして府中と八王子と奥多摩、それからさらに都心の例といたしまして本郷、それから都外の例といたしまして水戸、そういう何か所かにステーションを設けまして、同じ日に同じ方法によって炭酸濃度を測定したことがあります。これは植物の盛んに活動している夏と、それからほとんど落葉している12月、3月、こんなようないろいろな時期を変えて測定してみております。結果の1部を図3に示します。絶対値よりも変化の傾向に注目して下さい。

それによりますと、東京都内の炭酸濃度というのは季節によってきわめて違うという点が1つ。もちろん植物の盛んに活動しているときは、昼間は炭酸濃度が下がり夜間には上がっていく。それからやはり都心はその程度が小さいということ。それから、夏に比べると冬の上がりの方が大きいということ。たとえば深沢や本郷の場合は 500ppm を超える値が何回か測定されております。

もう1つ非常に大きな特徴といたしまして、都内いろいろの場所の空気中の炭酸濃度というのは、前に述べた条件以上に風によって非常に影響を受けているということ。風の強い日は冬であらうと、夜間であらうと上がりが多い。風の弱い日には、いま申しましたように昼間下がり夜上がるという形が都心を遠ざかる程あらわれてくるわけであります。これは申し上げるまでもなく植物の活動に大きく依存しているわけであります。そういう依存の度が都心になるほど不明確になる。これはかなり

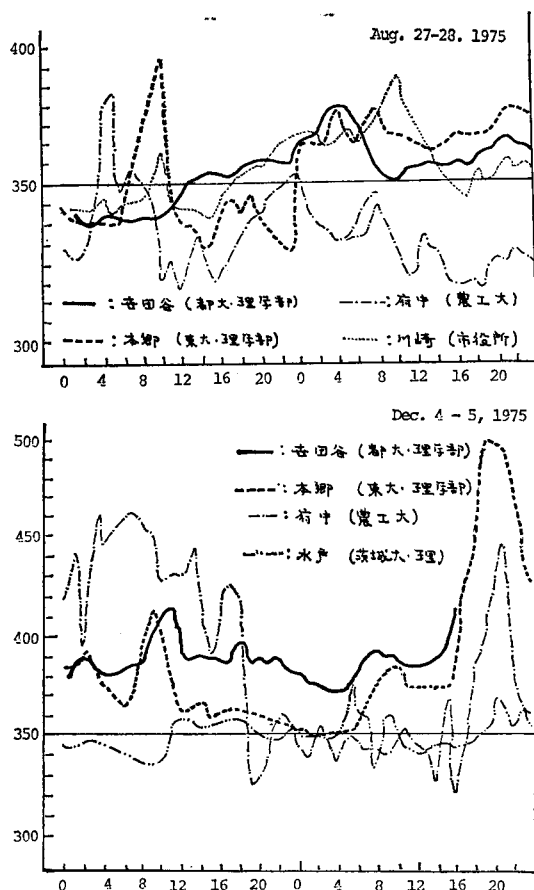


図3 8月(上图)および12月(下图)都内各地における空気中のCO<sub>2</sub>の日変化

はっきりそういう傾向が出てまいります。言い換えれば、23区あるいは都心、密集地域では自然による環境調節あるいは保全的な機能がきわめて微弱にしか働いていないということでもあります。

申し上げるまでもなく、自然というものを考えた場合、有機物をため込んでいる、たとえば木の場合は幹とか根というところにため込んで、そこにたまった有機物の炭素というのはそう簡単に循環はいたしません。すなわち化石燃料の炭素と同じように余分の酸素を空気中に残し、空気中の炭素を循環の経路から外れています。それだけわれわれの環境には貢献しているわけでありませう。そういう意味では、草原に比べますと森林の貢献の度合は非常に大きい、けた外れに大きいということが言えるわけでありませう(表1参照)。

森林は草原や耕地に比べまして、落ち葉その他のかっこうで土の中に大量の有機炭素を保有している。これは別の人の計算であります、現在地球上に残っている森

林の25%をもし開墾するというようなことをいたしますと、それによって今まで固定されていた有機炭素が空気に出てまいりますけれども、そうなった場合の出てくる有機炭素の量は産業革命以来人間が使ってきた石炭、石油の燃焼による炭素をはるかに超えるという計算がなされております。

そういうように森林というものには特に重要な環境保全的な機能を持っている。都内の森林がいかに少ないかということはもう申し上げるまでもございませう。都心からずっと郊外にかけて非常にはっきりした森林の占める割合のグレードが現在存在している。こういうところでは、われわれの立場からいたしますと、やはり人工的にも緑地、特に森林をつくっていく、それが非常に重要なことではないか。最初に申しましたように都市、東京の場合には自前で環境保全はとうていできない。周りの県あるいはもっと広く言えばカナダ、シベリアの森林に依存してわれわれの環境が保全されているわけでありませうが、こういう環境の「南北問題」というようなことを考えますと、やはりわれわれ都市の生活者としては多少なり保全の努力をする義務が必要であると思ひます。それから、先ほども申しました心理的あるいは文化的な基盤としての環境を保全するという点からいたしましても、森林を保存する、あるいはこれを育成していくということが今後の非常に重要な問題ではないかという気がするわけでありませう。

いろいろ申し上げたいこともございませうが、30分をちょっと超過いたしましたので、これは古屋野先生の計画にあるいは外れているようなお話しかできなかったのではないかと思いますけれども、これで終わらせていただきます。

**古屋野** どうもありがとうございました。時間のことをやかましく申しましてどうも…。それと、また私が間によけいなことをはさんだりいたしまして恐縮に思っております。

最初千葉教授のおっしゃった集合高層住宅を1つの研究テーマにするのだというお話、これは都市研究センターとして今後そういう方向で、少なくともしばらくはそういうテーマを立てていかなければならないことになるかと思ひますけれども、そういう点から考えますと、宝月先生のいまのお話を伺いながら、集合高層ということになってきて、たとえばオープンスペース云々というふうなことを言っておりますけれども、緑という問題をどのように解決していったらいいのか何か新たな問題になってまいったような感じがいたしまして、私のようなそういう問題に非常に無知な人間にとりましては1つの大きなショックというふうに感じられます。

これはまた計画ということにたちまちつながってまいるかと思ひますけれども、それでは工学部の石田先生に

「最近の局住環境整備に関する研究の動向」ということでお話ししますが、計画という側面に加えて研究の方法というあたりにも多少お触れいただけるかと思います。そういう御期待を持って伺わせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

#### （４）最近の居住環境整備に関する研究の動向 （石田頼房）

石田(工学部) 工学部の建築学科の石田でございます。

きょうの私のテーマは、居住環境整備の最近の動向ということでお話しすることにいたします。

##### 問題と研究の諸面

石田 ここで言う環境は、いま宝月先生のお話にあったような自然環境ではなしに、むしろ人的あるいは計画的につくられる環境の問題であるわけです。都市計画の分野では、最近居住環境整備、特に狭い地域での居住環境整備に多くの研究者が取り組んでおります。まず、なぜそういう研究が盛んに行なわれるようになったのかということをお話して、その中でどういう形で研究が行なわれているのかということを2番目にお話するというところで私の与えられたテーマについて報告とさせていただきます。

居住地環境整備の研究の必要性が議論されてきている背景は大きく言って3点あるかと思います。1つは、いままでの住宅問題に対する研究あるいは政策的な動向に対する一定の反省の上に居住地環境整備の必要性が言われているということです。それから第2は、従来の都市計画事業、たとえば道路の建設などによって居住地の環境がむしろ破壊されているということに対する反省からくる研究の必要性です。3番目は、都市計画に対して住民参加ということが最近しきりに言われているわけですが、その面から見て、居住地環境整備、特に狭い地区でそのような課題が、都市計画への住民参加の1つの過程としてどうしても必要だという点からこの種の研究の必要性が説かれているわけです。

第1番目の住宅問題に関連した点で言えば、いままでの住宅対策あるいは住宅問題の解決の方法というのが、とにかく低家賃の住宅を大量に建設するというに解決の手段が求められていたわけです。要するに住宅のフローのことを非常に問題にしてきたわけですが、公共住宅政策のもとに供給される住宅がフローの面に非常に少ないということも原因になって、実際上はストック、現実に建っている住宅が非常に劣悪な質——それは住宅そのものの質ということだけではなく、環境を含めた質の問題で非常に劣悪な状態にあるということが現状の問題になっております。

いままでのように、郊外の新しい住宅地を開発してそこに新しいフローとして住宅を供給するというのではなく、まさにいま問題になっている劣悪な住宅環境に置かれている劣悪な質の住宅、要するにストックですけれども、このストックを改善していくことが住宅問題の重要な観点になってきているわけです。と同時に、現在すべての住宅が劣悪な状態にあるのではなく、住宅の質としても、居住環境の質としても比較的良好な状態にあるものも少なくないわけですが、これが従来は放置され、あるいは高層集合住宅の建設が盛んに行なわれることに伴って起こる日照問題のように環境が破壊されていっている。要するに良好なストックがあるにもかかわらずそれがだんだん破壊されていっているという問題も起こってきているわけです。

また、新たに付け加えるフローの問題でも、居住環境水準に対する要求の向上に伴って、建てさえすればいいという状況ではなくなってきた。したがって、住宅の質としても居住環境の質としても良好なものを供給し、そのことによって良好なストックを増加していくことが必要だ、こういうように言われてきているわけです。要するに、住宅そのもののばかりでなく居住環境を含めた良好なストックをいかにふやすのか、逆の言い方をすれば、劣悪なストックをいかになくしていくかということが住宅問題の重要な課題であるというふうに最近では認識されてきています。したがって、その面から居住環境整備をいかに進めていくかということが研究されなければならないようになってきています。これが第1の背景であるわけです。

第2番目の点について言いますと、いろいろな例が挙げられると思いますが、たとえば道路を考えてみますと、従来の道路計画は自動車が増加するのに対して増加する自動車がスムーズに走れるような道路を計画する、こういうふうに課題を設定していたわけです。ところが最近では、そのようにしてつくられた幹線道路に対して、それが生活環境を破壊するものであるという立場からの反対が住民によって提起され、あるいは計画に対しても反対運動が展開されているということが現状としてあるわけです。さらに自動車の増大を当然のこととして計画の前提に考えてきたわけですが、その自動車は幹線道路を走るだけではなく、結局は住宅地の奥深くまで入り込んでいわゆる生活道路の中に自動車が入り込む、そのことによって非常に狭い地域での生活環境が侵され、大きな問題を提起しているわけです。

そういうことから、従来のような、車はふえるものだという前提に立って、それをいかに流してやるかという道路計画を立てるだけではなく、自動車をコントロールし、あるいは生活面を重視した道路計画のあり方を考えるということが必要になってきて、これは単に道路だ

けを計画するということではなしに、居住環境における道路という形で、先ほど言いましたような居住地環境整備の全体的な課題の中で考えなければならないということになってきていると思うわけです。これが第2の背景の1つの例であります。

それから第3の背景としては、先ほど申しましたように都市計画に対する住民参加が非常に大きな課題になってきているわけですが、住民が都市計画に対して関心を持つ立場としては、1 番端的にあらわれてくるのが自分の居住体験に基づく身の回りの問題に対する関心であります。したがって、都市の総合計画あるいは都市計画のマスタープランというような大きなスケールでの問題に対して、直接的に個々の住民の要求をぶつけ、そこに反映させていくということはなかなかむずかしいというのが現実でありまして、むしろそのような住民の身の回りの居住体験に基づく関心を、住民自身が住んでいる地区の居住地環境整備計画の中で反映させて、それを積み上げて都市の全体的な計画に反映させるという考え方が最近強くなってきております。そういう意味でも、居住地環境整備計画というものが必要であるということが言われるようになってきています。この3点が必要性の背景というふうに言えるだろうと思います。

それから第2 番目には、ではどのような研究が行なわれているのかということを考えてみますと、大きく分けて4つに分類ができるのではないかと思います。

第1 番目は、居住地環境というのがどのようなものであるかという、いわば居住地環境に関する原論というのか理論というのか、そういう点が挙げられると思います。

それから2 番目には、これは都市計画の考え方やわけですが、そういう居住地環境の発展の法則性を研究し、これに働きかけていくのが都市計画である、こういう考え方があるわけですし、居住地環境が現実にとどうつくられ、守られあるいは次第に悪化していつているのかという発展法則を研究するのが第の範疇だろうと思います。

それから3 番目は、では都市計画は居住地環境の発展法則にどう働きかけられるのか、どのような働きかけがあるのか、そういう手法の研究であります。

それから4 番目には、その手法をどう使っていくのかという、いわば計画論の研究でありまして、これにも手法そのものの改善の問題、手法の適用の仕方、それからさまざまな手法をどう総合化するかといった問題、こういうような範囲があらうかと思っています。

### 居住地環境の構成要素

石田 それぞれについて簡単に状況をお話いたしますと、まず居住地環境とは何かという点についての研究があります。これは2つの点があると思います。つまり、

居住地環境というものを都市計画の立場でも決して物的なものだけというふうには考えていないわけでありまして、むしろ物的なもの、これは宝月先生のお話にあった緑なども含めてそういう物的なものと、そこにおける人間の行動、活動というものによって環境が構成されていると考えていると言ってもいいと思いますが、それがどういうふうに組み立てられているのかを追求する研究でありますけれども、2つのことが最近言われていると思います。

1つは、居住地環境の物的な構成要素としてどのようなものがあるかという点です。これは居住地におけるいわゆる相隣環境というような言葉が使われておりますけれども、たとえば日照の問題とか火災の危険などの問題とかいろいろ挙げられると思うのです。こういっような問題が起こる物的な要因になるのは土地と建物が現状どうなっているのかという点です。それから、人間が居住環境で行動をする環境を規定するものとして、区画街路とか細かい生活道路などがどういうふうに整備されているのかというような点があります。あるいは給排水地域施設といったようなものもあげられます。このように構成要素に分けて居住環境を整備する。もちろん緑の問題も当然入ってくると思いますが、いわば居住地環境の構成要素論とでも言ったらいいたいと思うのですけれども、こういう種類の研究がありまして、いままでは漠然と考えられていたこれらの居住環境をそれらの構成要素に分けて、それがどう組み立てられているのかという議論を進めている研究があるわけですね。

### 居住地環境の発展法則

石田 それから2 番目には、これらの構成要素がどう組み立てられているかということ空間の大きさから論ずるものであります。1 番小さな環境の単位としては住戸というようなものが挙げられますし、その次の段階としては街区というものが挙げられる。その次の段階としては住区。そしてさらに大きなものとしては都市全体というものが挙げられて、それらの中で先ほど挙げたような土地、建物、区画の街路、給排水地域施設といったような構成要素がどう組み立てられて、それぞれのレベルで何が問題であるかという検討をしている研究があるわけですね。

これらがフィジカルプランナーの方から見た居住地環境に関する、居住地環境とは何かという議論であります。これに、社会学の方とかかわりが深くなるとは思いますけれども、ではそういう物的施設に規定されて、あるいは逆に物的施設をつくり出しながら、そこで個人あるいは人間の集団の行動がどう行われているのか、そういうものと一体としての居住地環境というのはどう構成されているのか、こういう原論的な議論が研究の1つの

方向として進められております。

それから第2番目としては、そういう施設と人間の営みとが組み合わさったものとしての居住地環境がどうつくられ、あるいは守られ、あるいは変化して——変化は改善される場合と劣悪化される場合とがあるわけですが、変化しているかという発展法則性、少し大上段に振りかぶって言えばそういうものの研究があるわけですから。

これは2、3の例をあげてみればわかると思うのです。たとえば既成市街地における土地、建物の細分化が具体的にどう進んでいるのか。特に最近ミニ開発というような名称が使われておりますけれども、きわめて小規模な1戸建て住宅地の開発が既成市街地で非常に大量に行われておりまして、それが地域の居住地環境をきわめて劣悪化させる原因になっているわけです。こういう現象がどういう過程を経て起こってくるのか、もとの土地はどういう土地であって、それをどういう業者がどういう形で細分化をして、どういう最終需要者がいるのかというようなことを通じて、こういうものができているという原因を探るような研究があるのではないかと思えます。

あるいは道路に関して言えば、これはつくると言うよりは使われ方の問題ですけれども、現在のような生活道路の状態の中で、歩行者とか地域の中の居住者が持つ車などが実際にどう動いているのかということを研究し、それが自動車の増大に伴ってどのように変化してきているのかということを追求するような研究があります。

このほかに例を挙げれば非常にたくさんになるわけですが、こういうような形で現に居住地環境をつくり出し、それを使い、あるいはそれを変化させていっている法則性がどう動いているのかを研究する研究が非常にたくさんいろいろな分野にわたって行われているわけです。

### 都市計画の手法

石田 われわれは都市計画という仕事をしている関係で、発展の法則性がわかっただけでは何にもならないわけでありまして、それを望ましい方向に誘導していく、要するに計画をし、改善していくということがわれわれ応用科学の分野の仕事なわけですが、そのためには都市計画としてどういう手法を持っているのか、あるいはどういう手法を持てばいいのか、こういう手法に関する研究が第3番目に必要になってくるわけです。

それで、手法に関する研究は、1つは手法としてどういうものがあり得るのか、あるいはあるのかという、手法の分類論と言うとちょっと正しくないのですが、たとえば都市計画の手法としてこれらに適用される方法としては、大きく分ければ規制手法——法的あるいはその他の方法によって規制を加えていくというやり方

と、具体的な事業を行なって変えていくやり方とがあるわけです。さらに、規制するという、物をつくることを規制する手法、これは建築基準法のようなものとか土地利用規制のようなものがあります。それからさらに使い方を規制する方法というのがあり得るわけでありまして、例を挙げれば交通規制というようなものも1つの都市計画的な手法であります。

こういうように制度を分類し、そのあり方を考えるというやや原論的な研究のほかに、手法が具体的にいままで適用されて、それがどういう効果を持ってきたのかということを研究して、そのことを通じて手法の改善を図っていく、こういう研究がまた数多くやられております。

たとえば建築協定というものが建築基準法の中に制度としてあるわけですが、これが実際に日本の中でどのようにつくられ、どのように運用されてきているか、そして制度的にはどういう問題があるのかという研究があります。こういうような日本の現実の中での手法の運用状況から研究する方法が、このほかたとえば区画整理とか交通規制の効果の研究とかいうような形で数多く行われております。

さらに諸外国の、たとえば西ドイツの詳細計画制度というようなものがございまして、そういう諸外国の居住環境整備の制度が実際にどう適用されていて、それが持っている問題点を研究し、その日本への導入について研究をすることもおこなわれております。

こういうような手法の効果を判定し、それをもとにして改善していくという研究が2番目の発展法則性の研究と同時に都市計画の分野では最近非常に多く行われているわけです。

### 都市計画手法の適用

石田 それから最後に、計画論的な研究ということでありますが、これらの都市計画手法をどう使っていくかという研究であります。

それは先ほど言いましたように3つに分けられまして、1つは個々の手法をどう改善するのかという研究があるわけです。先ほど言いました建築協定の例で言ってみれば、単に建築物をどのように協定によって規制していくのかという点だけではなくに、それを土地の細分化とか緑化の問題とかに結びつけて環境協定のようなものに発展させていこうという研究が行われております。

それから、西ドイツの詳細計画制度を日本に適用する場合に、どの点が日本の居住地環境の発展法則から見て改善されなければいけないのか、どの点は使えてどの点は使えないのかということを整理して提案をしていく、こういうことが行われているわけです。

これはいわば1つ1つの手法をどう改善するかという問題であります。2番目はその手法をどう適用していくかということが問題になってきます。手法をどう適用していくかということを一般論として考えていくためには、都市の居住地環境というものが具体的にどのような種類に分類できるのか、いわば地域パターンに分類する研究というものが前提になってきます。

最近研究者のグループで取り組んでいる例としては、大都市地域を建築の容積とか建築の種類とか形成のされ方、道路の形といったような指標によって幾つかのパターンに分類して、それぞれのパターンに一番適した居住地環境改善の手法を当てはめる、こういう研究があるわけです。これらなどは単に手法の改善というだけでなく、適用方法の改善と言える研究ではないかと思えます。さらに最近問題になってきている住民参加のあり方を考える研究なども、いわばこの手法の適用方法の改善の研究の一環として考えられないこともないと思えます。

それから3番目には、個々の手法をどう適用するかという問題ではなしに、そういうさまざまな手法を使って、対象となるような、いわば狭い土地の都市計画をどう進めていくのかという研究でありまして、これは最近、地区計画とか地区整備計画あるいはコミュニティプランニングというような言葉が使われておりますが、このような都市計画の新しいジャンルを確立していくような主張としてあらわれてきているわけです。

いままで申し述べた居住地環境とは何かという研究、それから居住地環境の発展法則の研究、それから手法の研究あるいは手法の個別的な改善、個別的な適用の方法の改善の研究というものをいわば集大成して、新しい都市計画の分野として地区整備計画というものを確立していこうというのが、この分野の都市計画の研究者の全体的なねらいであると思えると思うわけです。

こういうような形で、都市計画と住宅問題のいわば接点のような形で居住地環境整備の研究が進められているわけでありまして、来年度の研究計画のテーマは大都市居住の問題という形にすべきではないかというふうに申し上げたのも、実はこういうような都市計画あるいは住宅問題の研究分野の動向から考えてみると、単に大都市の「住宅問題」ではないし、まさに大都市における居住、住宅そのものを含めた居住環境の全体の問題を追求することが必要だというふうに考えたからにほかならないわけでありまして。

時間も参りましたので、これで私の話を終わります。

古屋野 どうもありがとうございました。それでは、時間も迫りまして恐縮ですが、副田先生よろしくをお願いします。

## (5) 大都市における老人問題 (副田義也)

副田(都老人総合研究所) 全体のテーマとの関連がどうも私に余りよくつかめておりませんので、その点で私に期待されていることと多少ずれたようなことを申し上げるかもしれませんが、「大都市における老人問題」というこのテーマに沿ってごく一般的なことをお話申し上げて、その上で自分の受け持つ時間の範囲でゆとりがございましたら、最近の調査例なども1, 2お話してみたいと思います。

### 老人問題と老人福祉

副田 いま私に与えられておりますテーマでも老人問題という言葉が使われておりますが、これをどのように理解するかという点では、必ずしもいま社会学の中で広い範囲でコンセンサスが成立しているとは言えないだろうと思えます。そこで「老人問題をどう理解するかというところから本当はお話を始めるべきなんですが、そうしますと話が大変間延びがしてしまいますので、その点ごくかいつまんで申し上げてみたいと思えます。

私どもはよく社会問題、社会福祉の研究の中で生活問題ということを申しますが、この生活問題の一つとして老人問題というものを理解したいと思っております。そうしますと、人が老年期に入りまして生活に困るという際に、困る状態をもたらす原因と言いますか過程を理解しようしますと、大体4つぐらいのことをそこで言うことになるだろうと思えます。

1つは、年をとりまして十分に生活費を稼ぎ出すことができない。それから2つ目には、体が衰えてきて日常生活活動が十分に行えない。それから3つ目には、精神的能力が衰えてきて社会生活や家庭生活にふさわしい判断が自分で下せない。こういった3通りほどの事情がありまして、しかもかたえて加えて、一緒に暮らしております家族なり親族の私的な扶養が十分にその3つの事情に対応しない、こういうことになりますと老人が生活に困りまして、これをわれわれは老人問題というふうに呼ぶのだと思えます。

従来の老人問題についての論議は必ずしもこの第2, 第3, 第4の契機について十分な関心を払ってこなかったように思えます。それは、なぜそういう関心が払われなかったのかということでもいろいろ議論があるわけですが、そのあたりも全部いまは飛び越えて考えますと、老人問題というのがこういう形で社会問題として、生活問題として成立をする。そのときに私的扶養が力が足りない、経済的にも身体的にも精神的にも十分な扶養ができないということになりますと、当然公的な扶養というものが問題になるわけでありまして、それが最も言葉の広い意味での老人福祉ということになるのだ

ろうと思います。

### 所得保障

**副田** その内容はざっぱには二通りに区分できると言われているのでありますが、第1は所得保障であります。

先ほど老人がもう自分では生活費を稼ぎ出せない、それから家族からも十分な経済的な扶養が受けられないという場合に老人問題が1つ成立するということを申したのでありますが、これに対しては所得保障ということが考えられまして、その主要な手段は、文明諸国においては年金保険ということになっております。ただ、この年金保険だけでは生活費が十分に賄えないという事情がありまして、その場合に、さらにその不足分を補うものとして公的扶助、生活保護というものが位置づけられることになるかと思えます。

この年金だけでは生活費が賄えないという点につきましてもいろんな議論がありまして、たとえば年金は一体どのくらいの金額が適当であるかというような議論がありますし、そこで学者の見解はいろいろ分かれております。それからまた、年金が所得保障の基軸であって、公的扶助が補助的な立場に立つという考え方についても研究者の意見はいっぱい分かれておりまして、そういうあり方ではいけないというような説も日本ではかなり強いわけです。そのあたりも細かく入りますときりがないので、いまは省略いたしまして、とにかく所得保障がまず一方で行われる。

それからさらに、先ほど申しましたように老人問題は、体が衰えるあるいは精神的な能力が衰える、これに対して家族や親族の私的な扶養が十分に対応しない、この場合にも老人問題は起こります。

これに対して、社会的扶養として行われますのはサービス保障というふうに私ども呼んでおりますけれども、非経済的なサービスを行う、これによって老人の問題、生活問題を解消しようとする。このサービス保障には、これも大変大きな議論がありますが、2通りの方法が基本的には区別されるわけでして、1つは、施設をつくりまして、そこに老人を収容あるいは居住させてサービスを提供する、一般に老人ホームという言葉で知られているやり方です。それからもう1つは、老人を自宅に住まわせたままで、サービスを自宅の方に届けるやり方でありまして、これは老人ホームでのサービスをインスティテューショナルケアというふうに言いまして、老人を自宅に住まわせたままでサービスを提供するやり方をコミュニティケアというふうに呼んであります。

このインスティテューショナルケアとコミュニティケアの関係につきましても学会では幾つかの議論がありまして、実は私がいま申ししたのはそのうちの1

つの考え方です。そういう考え方をとらない研究者もおりますけれども、これはもし関心がおありでしたら後から御質問くだされば御紹介をしたいと思います。さしあたっては、サービス保障はいま言うような意味で施設ケアとコミュニティケアに分かれるというふうに区別しておきたいと思えます。

それで、わが国の場合、所得保障は年金と生活保護が行われておりますが、年金制度が十分に成熟しておりませんので、いまのところ老人が経済的に生活に困るということになりますと、主要には生活保護が対応するというあり方が一般的かと思えます。もちろん、一部の老人には十分な年金が払われているという例はあるわけですが、総体として言えば、まだ生活保護が基軸的な立場にあると言わなければならないかと思えます。

### サービス保障

**副田** それから、サービス保障の方では、インスティテューショナルケアとしましては老人福祉法が規定しております3種類の老人ホームがあります。

これを簡単に申し上げておきますと、養護老人ホーム。これは後から多少詳しいことを申しますが、ごく大ざっぱに言いますと、生活保護を受ける程度に生活が苦しく、その上身の回りのことがもう自分ではできない、あるいは周りにそういうことをやってくれる人もいない、典型的なケースを言いますとそういう老人が入る養護老人ホーム。

それから2番目が特別養護老人ホーム。この老人ホームは、24時間寝たきりであるかあるいはそれに準じるような老人ですね。当然生活活動は他人の手が必要でありますけれども、こういった老人の場合、特別養護老人ホームに入ることになります。ただ、これは法律的には所得による制約がないのですけれども、実際には特別養護老人ホームは大変数が足りませんので、やはり入れるときには貧困層から先ということになりますので、事実上は所得の制約、所得額による制限があると言ってよいかと思えます。

それから3番目が軽費老人ホーム。これは老人福祉法の範囲では、当初は養護老人ホームが生活保護を受ける程度のいわば極貧層を対象にしておりますので、その一段上の低所得階層を対象にしましてつくられたのでありますが、これも法律の取り決めと実際に行われていることがかなりずれてしまいました。現在調査してみますと、実際には私どもの社会学の方で言います中流階層の上ぐらいから上しかこれは使えない、使っていないというのが一般的のように思われます。

それから、わが国では老人ホームはこの3種類のほかに有料の老人ホームというのがありまして、これは老人福祉法が特に規制をいたしません。もちろん何か行政の



側での最小限の身の回りのようなことはやるわけですが、それだけでありまして、ですからこれはむしろ有料のちょっとデラックスな老人ホテルとか老人アパートというふうに理解をしていただいたらいいのではないかと思います。老人問題に対応する老人福祉という場合には、この有料の老人ホームというものは余り問題にならないかと思います。

それからコミュニティーケアであります。施設ケアとコミュニティーケアの関連を言いますと、予算的には老人福祉関係の予算はほとんど老人ホームに使われておりまして、コミュニティーケアが全体の中で占める割合は5%程度かと思えます。ですから、これは名称だけまだありまして実体が余りないと言えるかと思えます。そのうちで皆さんが比較的良好に御存じになっている一般的なものはホームヘルパー制度と老人クラブの助成かと思えます。

これは老人問題と言いますよりは、それに対応する施策の大変駆け足の説明であったわけですが、その上で老人問題そのものについて少し具体的にお話をしてみたいと思えます。

一般に、社会福祉の先進国で老人問題のあり方は、貨幣的な要因がだんだん後退しまして、非貨幣的な要因、ノンマネタリーな要因が正面に出てくるということが言われます。それは先ほど言いました経済、身体、精神という老人の側にあります3つの要因で言いますと、経済的な要因に基づく老人問題というものは大体解消済みという形になってきた。これは年金制度の成熟と関連していると思えます。これに対して、むしろ深刻なのは身体的精神的な原因に私的扶養が十分に対応できないところからくる問題であるということが一般論として言われておりまして、わが国でも1960年代にその傾向がだんだん出てきたということになっております。大体老人福祉法がそういったノンマネタリーな要因に対応する方策というものを主要に考えたわけでありまして、一応はそういうことが言えるだろうかと思います。しかし、実際に老人問題の現実的な調査研究をし、あるいは施策の立案に多少発言を求められておりますと、なかなかい申しましたような一般論では片づかない問題があるのではないかというふうに思えます。

話をわかりやすくするために大変乱暴な分類をいたしますが、私は老人問題という場合に、その老人問題の担い手となる老人を3つに分けたらいいのではないかと思います。

#### 老化性痴呆の老人

**副田** その第1は老化性痴呆の老人であります。痴呆老人というように略称をすることがありますが、この老化性痴呆と言いますのは医学上の用語でありまして、私

はそれについて正確な定義をする能力を持っておりません。ただ、東京都民生局がこの老化性痴呆の老人問題の対策委員会を昨年つくりまして、その対策を提言させました。この委員会は社会福祉の関係者と医療関係者、医学関係者半々で成立していましたが、両者の意見がかなり鋭く対立する場合もあって、その緩衝役というようなことでしょうか私が委員長を仰せつかりましてお付き合いをいたしました。そのとき医学畑の方からお教えいただいた簡単な定義を申しますと、これは全くの受け売りであります。1つは、記憶力が非常に衰えて自分の名前を忘れるという程度に至った者。その上で、大小便を自分でコントロールできない、失禁が日常的になっている者。この2つの条件が重なっている場合には痴呆とみなしてよろしいというふうにその席上でお教えをいただきました。

これは先ほど言いました老人問題の中で、身体的、精神的な原因による老人問題の最も深刻なものであるかと思えます。もちろん当人はもう働けませんので経済的な困難というのもこれに伴いますけれども、実際に世話をします家族の側から言いますと、金が稼げないというようなことよりも心身の能力の衰退ということの方が非常に重い負担になってまいります。

この老化性痴呆の老人が一体どれくらい出現するか。さしあたって大都市の老人問題という場合には数量的なことが問題になるのだらうと思うのですが、これは従来日本では十分な調査研究がありませんでした。ヨーロッパ諸国の数字を見ますと、全老齢人口の5%前後が大体痴呆とみなされるというふうになっております。これは改めて言うまでもないかと思えますが、医療体制が整えば整うほど老化性痴呆はふえてまいります。と言いますのは、現代医学は老衰を防ぐことができないままに老人を生かし続けるというような水準にありますので、心身の能力がうんと衰えながらなかなか言葉が余りよくないのですが、死なせてもらえないというような状態にあるわけでありまして、そこで、文明国ほど痴呆の老人がふえるという事実があります。

わが国の場合は、去年の東京都の老化性痴呆対策委員会が聖マリアンナ医科大学の長谷川和夫教授にお願いをしまして、教授も委員の1人でしたが、この老化性痴呆老人の出現率の初めての本格的な調査を行いました。これによりますと、東京都の場合の痴呆の出現率は4.5%であります。この痴呆を軽度、中度、重度と分けるようでありますので、私は対策の立案上、重度だけの数字をいただきたいということをお願いをしましたが、現在の調査水準ではどうしてもその区分がむずかしいということで、込みで4.5%という数字しかいまのところは出ておりません。

## その対策

**副田** しかし、この4.5%という数字は大変恐ろしい数字であります。と言いますのは、わが国の老人ホームは全高齢人口の1.2%程度を収容するのみでありまして、もしこの痴呆老人を老人ホームが引き受けるということになりましたら老人ホームは絶対的に足りないということが明かであります。

ところがさらに問題は深刻でありまして、現行の制度では、老人ホームは老化性痴呆の老人を引き受けることができません。そこで実際にはどうしているかと言いますと、この老化性痴呆の老人は私的扶養にほとんどゆだねられております。しかし、事態がどうしても絶望的である、たとえば火をもてあそぶ、ふん便を壁になすりつける、一家を出たら迷い老人になってしまうというような状態になりますと、これはもう家庭は崩壊するほかありません。事実崩壊するケースがたくさんあります。そこで福祉事務所は、そうなりますと、こういった老人たちを結局精神病院に送ることよりほかいまのところ打つ手がないわけです。老人ホームは鍵をかけて老人を閉じ込めるというようなことを許されておられませんので、痴呆老人は預かることができません。

そうしますと、これは本当はうんと慎重なものの言い方をしなければならぬのですが、実は精神病院で痴呆老人を預かる病院と言いますのは、何と言いますか、必ずしも病院としてのランキングが高くない病院であります。と言いますのは、精神病院としましてはやはり精神病を治すということが目的でありましょうから、治る見込みがない痴呆老人を引き受けるというのは、これは点数稼ぎの傾向がある場合もある、ぐらいにしておきましょうか。そうではない場合ももちろんあるのですけれども、余り芳しくない評判の病院がこれを引き受ける傾向があるようであります。そうしまして、病院に送られますと、病院側では結局痴呆老人を静かにさせるためにはもう薬づけにするほかありませんで、大体入院しまして7カ月から8カ月ぐらいで死亡することになります。

この痴呆対策委員会でもその報告は福祉事務所の一線のワーカーから再三出されまして、合法的殺人であるというような極言まで飛び出すありさまであります。そこで福祉関係者はどうしても痴呆老人専用の老人ホームをつくってくれということを要求いたします。ところが医師は、痴呆に対してコミュニティーケアを主たる方策にするべきだということを主張してなかなか引き下がりがありません。医師に言わせますと、痴呆の老人だけを集めて隔離をするというのは痴呆の程度を進めるだけの結果にしかならない。また現在の医学の能力的な限界というものがあるのだけれども、もう少し待ってくれとこれを治療する可能性が出てくる。事実その委員会の終わり近

くに、東京都養育院の老人総合病院は、ごく一部の痴呆老人患者についてでありますけれども、これを手術によって治療したという成功例を出しております。それを考えますと、医師の言い分にも一理あるわけでありまして、いま隔離を制度化する痴呆専門の老人ホームをつくるのはやめてくれということをしきりに申すわけです。

私の印象では、やはり福祉関係者は痴呆老人を抱えた家族の苦痛を主として見ておりまして、家庭崩壊を防ぐためにということから痴呆専門の老人ホームをと主張いたします。これに対して医師の方は、やはり痴呆老人そのものを患者として治すというところに主眼点がありまして、そこで主張が食い違うのではないかと思います。

とにかく私は、いま大都市の老人問題で最も深刻な問題はこの老化性痴呆の老人の問題だろうと思っております。これは有吉佐和子さんの「恍惚の人」という小説で描かれまして、私はその小説は読んでいないのですけれども、大変世間的にはよく知られました。しかし、わが国の老人福祉法を初めとする施策は、この痴呆の問題を全然計算に入れないところで成立をしておりますので、ですからここが最も大きな盲点になっていると言っているかと思ひます。

ちなみに申しますと、アメリカ合衆国の場合、わが国の特別養護老人ホームに当たります老人ホームは100%痴呆老人を入れております。また養護老人ホームに当たります老人ホームで大体6割から8割ぐらゐが痴呆老人を入れているというふう聞いております。これを見ますと、なかなか医師の理想論だけでも片づきそうにありませんで、やはり痴呆老人、特に重度の者は老人ホームの制度を多少変えまして入れるということを考えざるを得ないのではないかとと思われるわけです。

## ホーム老人

**副田** 老人問題を担います老人たちの番目の範疇としまして、老人ホームを利用している老人、ホーム老人を挙げてみたいと思います。これは全高齢人口の大体1.2%程度であります。これが実際にはどれくらいいるのであろうか。つまり老人ホームに入りたいと思ひながら入れないでいる老人を含めると一体どれくらいになるのだろうかという試算がいろいろされているのですけれども、決定的な意見は出てきません。それでヨーロッパの例をとりますと、北欧諸国あるいはイギリスなどの場合で5%前後という数字が出ております。高い国でフィンランドでしたか、7%台ぐらゐですね。スウェーデンで4%台。ですから5%前後というふうに考えたらよろしいのではないかと思います。これを1つのめどにしようという考え方は厚生省などには強いようなんですけれども、実際には老人の扶養習慣が日本の家族とヨーロッパの家族ではかなり違いますので、すぐ5%という

のをみ込んでいいのかどうか、これはちょっとわかりません。

どうやら後から御紹介したいと思った調査はもう紹介できないのでありますが、私どもが調査をする限りでは、老人ホームに入りたいと福祉事務所に申し出てきまして、それでいて入れないでいるという老人はいまのところいないと言っているかと思えます。この老人ホームの入所経過につきましては、従来非常にずさんな調査しかありませんで、ことしの春から私が兼任で勤務をしています東京都老人総合研究所のプロジェクトチームがこの入所経過の調査に取りかかりまして、初めて本格的なものをやっております。これで見ますと、私どもの予想とは多少違っていて、これは都下の小平市、三鷹市それから杉並区ですでに調査を済ませておりますけれども、そういった老人ホームに入りたいと願いながら長いこと待機をしているというケースはほとんどないと言ってよいかと思えます。ですから、それだけから推論いたしますと、少なくとも養護老人ホーム、特別養護老人ホームの2つに限っては、大体需要をいっばいに満たしていると見ていいのではないかと。しかしこれはそう簡単に言い切れない問題があるということは存じております。聖費老人ホームに関しましては長期の待機者がたくさんありまして、これは結局ほかの2つの老人ホームとは多少区別をして考えた方がいいだろうと思えます。

### 養護老人ホームの問題

このホーム老人の場合で、いまやっております調査からの発見を幾つか御紹介いたしますと、まず1つは、一にはノンマタリーな要因が強くなった、経済的な条件が余り問題にされなくなってきたのだということと言えますけれども、なかなかそう簡単に言い切れるものではないと思えます。たとえば社会福祉の研究の方で不安定階層ということを申しまして、これは生活保護を給する状態にともすると転落しやすい階層を言うわけですが、この不安定階層と一般階層の区分を使いますと、養護老人ホームの場合には大体7対2の割合で不安定階層出身者が多いということがあります。しかも母集団、不安定階層対一般階層は1対4ぐらいの割合でありますから、それを計算に入れますと、28対2ぐらいの割合で不安定階層出身の老人の方が多い、つまり不安定階層の老人の方が約14倍ぐらい老人ホームに送り込まれる可能性が高いということが数字の上で出てまいりました。まだまだわが国の老人ホームは救貧施設的な性格が強いということが言えるように思えます。しかしそれにもかかわらず、先ほど言いましたノンマタリーな要因というものが少しずつ出ておりまして、今の1、2そのことについて例をお話ししますと、い一般階層で、たとえばこの席においで先生方は皆一

般階層ということになるわけですが、お宅で老人ホームに老人を送らなければならない事情が出てきたということになりますと、これは主要には人間関係の不和ということになるだろうと思えます。もちろん一般階層全体をとってみますと、住宅事情というようなこともありますけれども、これは先生方には余り関係がないことだろうと思うのですが、その人間関係の不和あるいは住宅事情というようなことで老人を、たとえば養護老人ホームに送ろうとしても、先ほど言いました所得での制限がありますので、すぐは送るわけにはまいりません。そうしますと、そのための便法としまして世帯分離という方法があります。

私は法律は専門ではありませんので、自分の仕事の範囲でわかっている限りで申しますと、これは老人を書類上だけで一人世帯に切り離してしまいます。そうしますと、その老人は無収入一人世帯になるわけでありまして、これで養護老人ホームに入る資格が出てまいります。こういう便法を使って老人ホームに老人を送るということが制度的にあることは私ども知っておりました。ただ、この世帯分離につきましては、どうしてもやむ得ない場合にそういうことをやってもよろしいという通知があるだけであります。ですから、このことについての公の統計というものがいままですくられたことがありませんでした。私どもが今度2市1区でこれを丁寧に追っかけてみますと、世帯持ち、つまり世帯の中にいた老人が老人ホームに入る場合には、大体その3分の1が世帯分離をして入れられているということがそこで確認できました。われわれは恐らく5%か10%程度世帯分離があるだろうと思っておりましたら3分の1という数字が出てまいりまして、これは非常にびっくりさせられました。ですから、この限りではもう経済的要因を離れまして、養護老人ホームでも人間関係の不和なんかに対応し始めているというわけで、変化が起こっているということとは言えるのではないかと思います。

それからまた、住宅事情で考えますと、養護老人ホームの場合は大体割くらの老人に対して住宅機能を果たしている。つまり住宅が狭いということが、唯一の理由であるか複数の理由の1つであるか、それは問わないとしますと、養護老人ホームに入ってくる老人の半分までは住宅事情が絡んでいる。ということは、裏を返しますと、住宅政策を整備すれば養護老人ホームには5割あるいはそれよりは幾らか少ない、これを3割と見積もる人もいるのですけれども、その程度の老人は入らないで済むということが言えるようであります。こういう意味では、わが国の老人ホームはまだまだかつての救貧施設の役割り、性質が非常に強く残っておりまして、脱皮が急がれるという状態であります。

### 自宅にいる老人

**副田** 以上で時間を使ってしまったのですが、もう一言だけつけ加えさせていただきますと、3つの目のカテゴリーとしまして、在宅の、自宅にいる老人で老人問題の担い手であるという人々があります。この場合年金が——国民皆年金ということを考えますと、全老人が老人問題の担い手になるわけですが、いま主に身体的、精神的要因による老人問題のことを考えてみますと、結局何か心身、特に身体に障害がありまして家族だけではケアが手に負いかねる、しかし家族としては老人ホームに送るというところまでは踏み切りたくない、だから多少お手伝いを願いたい、こういう老人に関しましては、私どもの研究所で、これは私は入っておりません、別のプロジェクトチームですけれども、この間、日野市で徹底的なスクリーニングをやりまして、そういった老人の数を割り出しまして、5%という数字を得ております。これはデーケアセンターという施設を考えているわけです。日本語で適当な訳語がないのですけれども、託児所という言葉がかつてありましたが、それをもじって託老所というようなことを言う人がおります。昼間だけ老人を預かりまして世話をする、体に多少欠陥がある老人の世話をするセンターであります、これを必要とする者が5%程度という数字が出ております。そういった徹底的な調査を老人ホーム、ホーム老人の場合でも行えばいいと実は思っておりますが、これはまだ手をつけておりません。

大都市における老人問題ということになりますと以上のようなことでありまして、痴呆老人とホーム老人と、それからデーケアセンターを必要とする在宅老人、こういったところがいま私どもの関心の焦点としてあるわけであります。

以上でございます。

**古屋野** どうもありがとうございます。これはオーガナイザーである私の大変手落ちがございまして、やはり事前にスピーカーの先生方のお話をよく承って、そうしてまた全体の計画をもお話し申し上げて、それに御協力いただけるようになり詳細にそういう事前のお話し合いをいたすべきところを全くいたしておりませんままに各スピーカーの先生方にもお願いしてしまいました。ところが話を何かこういったテーマに沿う形で、ポイントを突いたお話しにいただけて、全体としてもいろいろ私どもの今後の研究計画に指針をいただけたような感じがいたします。特に先生方が問題点の指摘と申しますか、この点を非常に系統的にお話しいただきましたことをありがたく思っております。

それで、これは全く進行係の不注意と言いますか不手廻で、スピーカーの先生方には十分に時間をお使いいた

だけず、また、予定いたしております時間がだんだん迫るようなことになってしまいましたけれども、ここでしばらく休憩をいたしたいと思います。

(約十分間休憩)

**古屋野** どうもお待たせいたしました。

### (6) 討議と総括

**古屋野** それでは引き続きまして、あとわずか30分くらいかと思いますが、もしもお話を続けさせていただきます。

#### 報告のまとめと問題

**古屋野** これからは、お話しいただいた先生方にお尋ねいただく形で結構ですし、また、お聞きになった方々の方から多少の御意見をいただいても結構だと思いますが、私なりにちょっといまのお話をごく大ざっぱに整理にもなりませんけれども、何かまとめるような形を試みを申させていただきますと、1つの問題として、大都市環境ということと、その中で人間居住を位づけるという大きなテーマがございそうです。この点では、特に千葉、宝月、石田お3方の先生がそれぞれのお立場からお話をなさいます、そして大都市という問題をまず最初に大きく踏まえる必要があるというところが何か確認された感じがいたします。

それから、その中で人間居住ということが出てまいります、ここにやはり住宅ということが1つの大きなテーマとして浮かんでまいりまして、その中で、最初千葉教授もおっしゃったような集合高層住宅というものが何か避けがたい一つの現実という形で、現在の都市の住宅問題として確立されてきた感じがあるということがございます。

それで、第2の問題の住宅をめぐる物質的な条件は申しますか、そういったことが一つ出てまいるかと思えます。これは当然自然環境ということで、宝月先生からのお話のありました問題点でございます。

それからさらに土地、建物あるいは人間活動関係者施設といったようなもの。これは石田先生が研究の要ということでお話しくださったわけですが、このように点がもちろん非常に重要な問題として出てまいるといえます。

それからさらに、同じ住宅をめぐる今度は社会的な点とか環境と申しますか、これがなかなか大変な問題でございます、きょうのお話の中でも、千葉先生の言われた欲望の集積としての都市、いわば都市悪というものがその中に大きく含まれましょうし、あるいはもっとポイントも出てまいりましょうが、そのことをめぐって紛争の必然性とか紛争の処理とか、あるいはもっと大

言えば都市計画の技術ということになるのかもしれませんが、そういうことです。

それから、やはり老人問題というものがこの住宅ということをめぐる社会的条件という中に何か相当大きく入ってくるのではないか。これは副田先生のお話からますますそれを痛感する次第でして、われわれ自身の問題でもありますけれども、社会問題として大変揺がせにならない事柄というふうな感じがいたします。

それから、それに加えてもう一つあえて申させていただきますと、住宅に住む人間そのものの問題というのが出てまいりまして、これは私どもが研究室でほんのささやかな勉強としまして、都内の1、2の高層住宅の人間関係といったことを2年ばかりぼつぼつ調査を進めております。そういったことで、たとえば近隣交際の問題とか、もっと広げて住宅コミュニティーみたいなどころから起こってくる問題、あるいは団地、団地外というようなこともございますけれども、きょうのお話に即して申しますと、その中で老人の扶養の場所としての高層住宅ということになると、これは一体どういうことになってくるのか。その人間がそういうふうに縦に高く上がっていきまして、1つに集まることさえ日本の場合は大変な。社会的にそういうことに適さない人間が集合住宅に住むわけで、それだけで1つの問題になるのが、さらに高いところまで住まなければならなくなるということで、これから考えてみましたときに、ちょっと想像のつかないようなむずかしい問題がそこから起こりつつあるのではないかという感じがいたします。

近隣との関係ということで、もちろんのことですけれども、また宝月先生の角度から申しますと、これがいかに住宅環境、人間の居住の条件をどのようにむずかしくしているかということにもなっておりまして、われわれが考えておりますこういう社会的な側面からの研究も、何かよほど考え直さないと今後進まないのではないということさえ思うようになりました。

そういうことで、いま何か問題の範囲みたいなものを申し上げたにすぎませんけれども、その辺で、どのような観点でも結構でございますから、いままで初めからずっとお聞きいただいておりますので、スピーカーでない方々の中から、ひとつ御質問のような形で、あるいは何か御意見がございましたらそれをお述べいただくということで、まず御質問のようなことからありましたら始めていただきますようか。

最初にきょうのシンポジウムのテーマのようなことをちょっと私の方から申し上げたわけですが、途中からおいになった方々もいらっしゃるのですが、都市研究委員会の一つのテーマといたしまして大都市における人間の居住、住宅ということを含んだ居住の問題というのを考えておりまして、それをどのように進めていくかという

ことがきょうの主催をいたしました都市研究委員会としては非常に大きな問題になっております。きょうのお話何かそれに対する問題のあり方、あるいはまた研究上の指針というふうなものを直接あるいは間接におっしゃっていただいたような感じがいたします。もちろんそれは現実の大都市居住のあり方、現状と申しますか、そういう点を直接あるいは間接的に御指摘いただいたような形でのお話だったわけですが、どのような観点でも結構ですけれども、何かございましたらどうぞ。

副田　ちょっと私、補論をさせていただきたいのです。

### 老人のための住宅の問題点

副田　御質問が出ればと思っておりましたが、どうも私、きょうの総合テーマを十分に理解しておりませんで、やはり多少ずれた答案を出したようでありまして恐縮しております。追っかけでありますけれども、最小限きょうのテーマと私がお話ししましたこととの結びつきを申しますと、1つは、わが国の戦後の住宅政策の中で老人のための住宅を建設するということがほとんど考えられないままに高度成長期が半ば以上まで来たということがあります。

これは先生方よく御存じのことかもしれないと思うのですが、わが国の住宅政策は地方都市あるいは農村から大都市及びその周辺部に流入します労働者のために住宅を供給する、働く人たちのための住宅政策でありまして、そこで労働力を持っておりません老人でありますとか母子所帯でありますとか心身に障害がある人たちの住宅政策が非常におくれました。国の基本的な発想は、そういう人々が住む家に困ったならば施設に行けばいい、母子の場合ですと母子寮、老人の場合ですと老人ホームに行けばいい、こういう発想でありましたので、結局社会福祉施設が住宅機能を代替するという一般の傾向がありまして、老人の場合にもそれが例外でなかったと思います。

この点で諸外国の場合を考えてみますと、たとえばオランダでありますとかスウェーデンでありますとか、それからデンマークもそうであります。いずれも大都市の場合、公営住宅の一部を老人と身体障害者にリザーブするというやり方をとっております。これはちょっと記憶で申しますけれども、15%前後を初めから老人のためにということとっておきます。ですからここには一般の人を入れません。もちろんその場合に家賃を払うことができない老人というのがいるわけでもありますけれども、そうしますとその家賃の分を補助をするという形で、貧しい老人あるいは身体障害者であるからといって、わが国のように低家賃住宅というようなものを設けてそこに入れるというようなことをやりません。これをやります

と、その後、低家賃住宅分は必ずスラム化するわけでありまして、東京などではその実例がすでに出始めております。そういう意味で、社会保障の給付内容の中に住宅を入れるという考えがヨーロッパの場合には割合に一般的ですけれども、わが国では認められていないという問題があります。

それから関連しまして、老人の町あるいは老人だけのアパートというような試みが欧米でかつて行われました。正確に言いますと、ヨーロッパでは、これは大変非人間的なものであるということでその試みが打ち切られておりますけれども、アメリカでは、いまでもまだかなりそれがあると思います。しかし、われわれはその方向で老人の住宅問題を解決するべきではないというふうに試みが打ち切られておりますけれども、アメリカでは、いまでもまだかなりそれがあると思います。しかし、われわれはその方向で老人の住宅問題を解決するべきではないというふうに考えております。やはり人が一人も生まれてこない、そして死んでいく人ばかりいる町というのは大変異様な町でありまして、そういった団地などをつくるべきではない、それは老人の精神衛生のためにも非常によくないのではないか。これが補論で申し上げたいことの1つです。

それからもう1つは、老人ホームをもっともっとつくらなければならないのですが、これは居住ということと関連いたしましょうか、いま東京で出てきております問題を2つ申しますと、1つは、この問題を考えますときにどうしても地価の問題が絡みます。そこで老人ホームの立地条件が非常に限られてきて、都下の比較的周辺部に老人ホームが集中してきております。これは老人ホームに入れるということが老人と家族を決定的に切り離すことになってしまう1つのきっかけになっているようがあります。つまり、家族が老人ホームに会いに行くのには1日仕事であるというような老人ホームがいまはふえてきているわけです。これが1つ問題になっております。

それからもう1つ、なるべく自宅を老人ホームと接近したように位置づけたいということがありまして、その場合に、それがどうしてもかなわないならば中間施設、ハーフウェーハウスというふうに呼んでおりますが、これをつくりまして、施設と自宅あるいは施設と地域の間で老人を流動させるということをこれからの老人対策では基本的な方針にしなければならないのではないかとということが言われております。

それは端的に申しますと、わが国では老人ホームというのは一遍入りますと、入ったら入りっぱなしというふうに考える習慣が老人にも家族にも社会一般にも強いのでありますけれども、そうであってはならない。老人ホームに入っても、心身の能力が回復をすればまた自宅に帰ってくる、その自宅と老人ホームの間を老人が流動す

る際に、その流動を加速するものとしてはハーフウェーハウスを位置づける。たとえばある程度治ればハーフウェーハウスに移して、そこで訓練をして自宅に帰す。それでハーフウェーハウスをなるべく自宅に近いところにつくるという方向で考えなければならないということが言われております。これも欧米で、やはり老人ホームが決定的に足りませんので、老人ホームから出ていく老人たちにトレーニングの場をつくろうというところから考えられたものだと思います。その中間施設のことを言い落しましたので1つつけ加えておきたいと思います。

以上でございます。

**古屋野** どうもありがとうございます。

いまお話しの点だけでもなかなかいろいろ問題があるようでございまして、お気づきの方々が多いと思うのですが、後者の方は、そういうふうに自宅と結びつけるということになるわけですが、老人だけを置くのがよろしくないで少し老人以外の年齢層の人々と何かその場で交流できるような考え方はないものかというやり方がとられた例もあるかに聞いておりますけれども、そうすると何かかえって子供たち、あるいは場合によると若者たちと老人との間がむずかしくなるというか、あるいは老人の中には必ずしもそういう若い年齢層の人々とともにあることを快く思わない人々が出てくるというマイナス面などが言われたりしますし、これは非常にむずかしい問題だと思います。しかしお話を伺っていると、いまの後者のハーフウェーハウスなんというのは、私は初めて伺ったことですが、何かいろいろ困ったあげくの一つの解決方法かなという感じがいたすのですが、やはり住宅問題、居住というふうな問題とは非常に密接ではないかという感じがいたしますね。

### 緑比率の問題

**小場瀬** (都市計画研究室) 先ほど人間と自然環境の間で、都市の場合というのはいわゆる生物的な生態系のバランスが全然とれていないというようなお話でしたけれども、いわゆる緑比率ですか、どれぐらい都市に緑があるべきかという議論をした場合に、基本的に生態的なバランスは緑比率をいまよりも若干上げた程度でとれるようなことがあるのか、全くとれないで、緑比率を多少でも上げるべきだという議論は、むしろ先生の御指摘のあった人間の感覚的快適性みたいな、その向上のためにだけ役立つというお話でしょうか、その辺はどうなんでしょうか。

**宝月** 非常に端的に申し上げてしまえば、少しぐらいの緑比率を上げて、それで自前の安定が保てるかと言うと、私はそれはほとんど期待できないだろうという気がいたします。

それから一方、容易に自然との調和を図れというよう

な言葉をよく聞くわけですが、私は自然との調和というのはそんな簡単に図れるものではないし、またそれぞれの場所でみんなバランスがとれていなければならぬとも思いません。あるところは相当崩れていてもそれはそれなりでやっていける。そのかわり、それだけよそにおんぶしているということですね。

ただそうすると、先ほどこっちと申しましたように、こちらの地域の人はある程度その自然を残せと言い、地元の人は開発しろと言い、そこで非常にエゴだなんだという問題になるので、やはりそれぞれある程度の努力と言いますか、これは言うならば誠意みたいなものかもしれませんが、いままおっしゃられた人間の精神的あるいは感覚的、心理的な効果というのはそれなりに期待できるもので、都市の緑についてはその面が1番大きいんじゃないかという気がいたします。

**小場瀬** そうすると、その面からいくと、いわゆる都市の人間のパフォーマンスというのですか、要するに満足感というのか、たとえば緑比率はこれぐらいであるべきだという主な決め手になるということですか。

**宝月** それがさしあたって1番大きな問題じゃないか。最近建設省ですか、地方都市を例にとって、幾つか緑比率の違う町で住民の満足感を調べたりしておりますね。やはり相当高い感じがいたしますね。東京はそれに比べるとまだまだ満足感を持たれるような状況ではないような気がいたします。

### 都市の公理の意味

**中林（理学部）** 千葉先生が最初にお話しになった3つの公理というのは、大都市を認識するための公理というのですか認識する上での公理というふうに伺ったわけなんです。これはちょっとぼくの理解の仕方の違いなのかもしないのですけれども、1つ非常に特徴的であるのは、大都市を分解するのではなくて大都市を大都市として認識することの必要さみたいな、大切さみたいな側面が特に1番目の話ではあったのではないかなというふうに受け取ったのです。

そのほかいろいろな話を、レポートを聞かせていただいていると、たとえば大都市における人間のつき合いの関係ですとか、あるいは狭い地域での居住環境の取り扱いですとか、つまり千葉先生も最後の方でコミュニティというような言葉をお使いになったと思うのですが、大都市におけるコミュニティですとかアイデンティティですとか、いわば何か大都市というとても大きい広がりなのだけれども、それをもう少し小さい人間のスケールというのですか、物をつくるというようなときにはそれで扱わざるを得ないのじゃないかなという感じも受けたわけなんです。その辺のことについてもう少し千葉先生の方で何かお考えがあったらお聞かせ願いたい

と思います。

**千葉** いまの中林さんの御理解なさったようにとっていただくことも可能だと思っておりますけれども、ただ私の公理と言ったのは、およそわれわれが都市というものを考える場合に、大きくても小さくても都市と言われるものの中に常に本質的に含まれている性質、したがってわれわれがそれを考えることを忘れてはいけないう性質、そんなふうに考えていたわけです。

ですから、それを今度は具体的に都市と言われるものをどのようなレベルでお考えになろうとも、そこには少なくともこの3つの性質はあるだろう、こういうふうに考えてます。

### 高層集合住宅か一戸建か

**高橋（学生）** 1番最初のお話をお伺いできなかったのですが、古屋野先生のお伺いしますと、大都市の話の中で高層化という言葉が言われましたけれども、それと、現在都市研究の関係でも、そういう1つの団地をつくるにしても、そういう高層住宅をつくるということ、それから民間はかなり進めている一般の住宅団地の2種類あるわけですね。それが一体これからどういう方向性を持っていくのか、あるいはそれは並列していくのか。

それと、ライフサイクルの中で高層住宅に住むのは何か一生ではないような感じを受けるわけですね。と言うのは、日本人的な発想からすると一軒家を持ちたいという1つの気持ちがあるわけですね。ですからその関係を、もしできれば千葉先生と石田先生の方から聞いてみたいと思います。

**千葉** 時間がないから簡単にお話しします。

ごもっともだと思います。いままでのお話それから住宅問題というようなことを考える場合に、1つとかく抜けるのはそこに住む人の主体の問題。これはいまあなたの言われたような一生の間に移動する問題と、それからもう1つは、そこで小さい子供たちが育っていく、特にソーシャライゼーションの過程の中で、こういう高層住宅の影響でどう社会化が行われていくかという問題があらうかという気がしますね。その点では心理の方と体育の方がいらっしゃるのですけれども、この両面からのアプローチが大変必要になるというような考えです。

**石田** 質問の趣旨を取り違えるかもしれないのですが、ぼくは大都市において、高層というのはどれぐらいからが高層住宅かわかりませんが、高層住宅というのが必然だというふうには必ずしも考えていなくて、高層住宅でも居住環境を一定程度に整備することを考えると、容積率でいって200%が精いっぱいですし、最近ある低層高密度という開発方式でいっても、150%はちょっと無理ですが、100%を超える開発が可能であると

思うわけです。ですから、これは大きくは大都市への人口集積というのをどれぐらいまで考えるかということに絡んでくるわけですが、すべての住宅形式を高層住宅にしなければならないというふうには考えない。ただ、一戸建て住宅というような形で進めていくことは非常に困難で、基本的には共同化ということが大都市の場合に必然なんだというふうに考えているわけです。

庭つき一戸建てというのは本当に住宅を要求する人の本心からの願いなのか、それとも現在の大都市の住宅供給の状態からくる、あるいは土地というものが単に住むための基盤というよりは財産として、減らない財産の保全方法というふうに考えられているから庭つき一戸建てというのを希望しているのかということは簡単にはわからない。現在で言えば確かに庭つき一戸建てというのがほとんどの人たちの最終的な住まいとして要求されているのだけれども、それがいろいろな条件を変えていっても変わらないのかどうかということに都市計画家はやや疑問を持っているのです。あるいは少なくとも私は、なのかもしれないのですけれども……。

#### 都市の適正規模

中林 確かにいま石田先生おっしゃられたように、たとえば大都市問題を考える場合に、東京とかという実際の場所を設定して考える場合に、特に居住あるいはその環境ということになると、いま先生は容積率という形でおっしゃったのですけれども、要するに密度としてどれくらいかという詰まり方の問題と、先ほどぼくは大都市を大都市として大きくとらえると言ったのですけれども、大きさがどれぐらいにセットコントロールできないのが大都市だと言ってしまうとそれまでなんですけれども、その受け皿というのですか、その辺がどれぐらいにできるのかという大枠の押さえみたいなのがかかなり基本的に大切になってくるのではないかとことを常々思っているのです。その辺がどれぐらいで抑えられるのかというのが、逆にそれができたらいろんな問題が解決してしまうということなのかもしれないのですけれども。緑の方の環境的な問題からの押さえも必要でしょうし、人間の心理的、精神的なストレスのような面からの適切なスケールみたいなものがあるのではないかなという気もしておりますし、そういうお話がまた伺えたらというふうに思っているのですけれども……。

宝月 いまどのぐらいの規模が適正かというようなことの御質問でしたけれども、これは私、根拠は詳しく知りませんが、東北大学の方に伺ったら、仙台を50万以下の人口に抑えないとだめになるということで仙台は努力しているということを伺ったことがございます。東京と周りの条件も大分違いますので、そのままではあれでしょうけれども。

古屋野 それでは4時15分で、ちょうど3時間続けましたので、本日はこれでこのシンポジウムを一旦閉会させていただきたいと思いますが、中野先生、御感想何かありましたらひとつ……。

中野 意見もあるのでありますが時間もありますから……。

#### 都市問題の見方

中野 われわれの扱っているような人間とか社会とか都市とか農村とかいうものを考えるときに、支配している法則という一般的な社会科学的、実験科学的な法則がある。これは抜きがたいものである。したがってそういう一般法則を追求していくという、研究する態度はどうしても切り離せないのですね。

ところがもう一つ、そういうものを考えていくときに歴史的法則というのがあるわけですね。歴史的法則は社会科学として頻繁に使うわけですが、しかしもう少し長い時間について言えば、自然科学についても、そしてまた現在のテクノロジーについても、そういう歴史科学的法則に照らしていろいろと批判、追求の対象になることもあり得る。

それからもう一つは、非常に重要なことですが、やはり地域的な法則に関する問題があるわけですね。

そういう点では、やはりグローバルなスケールあるいはコンチネンタルスケール、ナショナルスケールでの、あるいはそういうレベルに対応したものの考え方というものをシステムティックに整理していくことから始めていかないとぐあいが悪いだろうと思います。これは居住問題を考えてもそういうふうに思います。それが実は内包的には南北問題であったり都市と農村の対立問題であったりするわけですが、そういうレベルに応じた問題の整理、フレームワークの設定というのが一つあるだろうと思うのです。

それからもう一つ重要なことは、その場合に人間生存の条件として考えた場合にはグローバルにはクローズドシステムであるという認識から入るか、もしくはそういう認識を持っていることが一方では必要であるわけです。しかし、現実には都市とか都市的な地域というものはオープンシステムの考え方をとっているわけです。したがって、問題をほかへしわ寄せしていても知らぬふりしているし、そこで実は非常に対立的な都市と農村の社会的紛争の問題がいろいろあり得るし、またその中に組み込まれていくいろいろな法制度とか技術の問題もそういう問題の中で問題になると私は思う。都市が技術の実験場という考え方から言えば農村もまた実験場であるわけですね。その辺からオープンシステムの考え方をずっと追求していくと、多分地域のシステムの問題が出てくる



と思うのです。地域のリージョナルゼーションの問題が出てくると思うのです。その辺がフレームワークとしては張りついていかないとぐあいが悪いのではないかと。

それから細かい点で言えば、実はきょう人間居住の問題については、老人問題は出たのですが、これは非常にイクストリームに、ソーシャルに重大問題であって、やがてわれわれも老人になる。痴呆性老人でないことを期待するわけですが、そういう中で居住者の問題をそういうグローバルに、コンチネンタルにあるいはナショナルなスケールの中でものを考えていくという中で、特にナショナルレベルでの張りつけの問題が非常に重要であります。それを入れる入れものとしての住居の問題がやはり問題になるのではないかと考えております。

それからもう1つ、宝月先生の言われた緑の問題については、生存条件としての緑の価値の評価の問題は、先ほど補足的にも、必ずしも地方、地域で完結することを

考える必要はないというふうに先生は言われているのですが、それは前に申しましたグローバルなスケールでものを考えていく中で、地域的な完結ではなくとも、地域的な役割りについての理解の問題が出てくる。その辺になるとやはり政治の問題であるという気がするわけです。

実は、緑の価値というのはほかにもるる挙げられたのですが、地方、地域についてはやはり重要な意味を持っている。その辺の評価をもっと強く打ち出していくことが、もっと緑の問題を推進していく非常に重要なファクターになるだろうというふうに考えるわけです。私自身にとっては大変有益なシンポジウムでした。ありがとうございました。

古屋野 どうもありがとうございました。これでおしまいにいたします。(了)

〔付記〕 本稿は、頭書のシンポジウムの速記記録である。見出しは、編集者が便宜的につけたものであることを、御諒解願いたい。(編集者)